『ICU 比較文化』46〔2014〕
Article accepted Nov. 30, 2013

ICU Comparative Culture
No.46 [2014], pp. 129-183

『御製歌「よもの海」』をめぐる考察

本間　光徳

1．序論

本研究は明治天皇の『御製歌「よもの海」』の成立過程とその意味解釈の歴史的変化の究明を試みるものである。その為、前近代の和歌中に使用されたる「よもの海」なる語句の意味を調査し、明治天皇の『御製歌「よもの海」』に於ける意味と比較する。『御製歌「よもの海」』は 1941（昭和 16）年、対米英蘭支戦争の開戦に反対する昭和天皇が引用した事により、天皇の平和思想を表す御製歌として注目される。しかし、『御製歌「よもの海」』の解釈には多義性が認められるのではないか、との仮説の下、「よもの海」の意味を検証する。更には、明治天皇の『御製歌「よもの海」』と昭和天皇の『御製歌「よもの海」』の解釈のされ方の差異を、当該御製歌を拝聴した者の記録や御製歌の解説文から読み取り比較検討する。

『御製歌「よもの海」』とは即ち次の和歌を示す。

よもの海　みなはらからと　思ふ世に　など波風の　たちさわぐらむ

2．語句の定義と表記方法

当該御製歌は 1904（明治 37）年、明治天皇の作で、一般的に「よもの海」と呼称されている。本稿に於いても便宜上一般的呼称を使用するが、「よもの海」なる語句が含まれる御製歌は複数存在する。その為、上述の御製歌と他の御製歌及び和歌一般とを区別する目的で、本稿に於いては以下の如く、四通りの表記を使用する。(1) かぎ括弧及び二重かぎ括弧の位置に注意されたい。

一、「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」を、『御製歌「よもの海」』と表記する。

二、その他「よもの海」なる語句が含まれる御製歌を、御製歌「よもの海」と表記する。

三、「よもの海」なる語句が含まれる和歌一般を、「よもの海」と表記する。

四、「よもの海」なる語句自体も、「よもの海」と表記する。

又、表記上の差異を論ずる場合等、表記上の中立性を担保する目的で *yomonoumi* と斜体ローマ字表記とするか、必要に応じ、「表記を問わず」、「表記の如何に拘わらず」等、前置きをする。その他のローマ字表記も同目的の為に適宜使用する。尚、和歌の引用にあたっては、読み易さを考慮し句毎の分かち書きとする。

繁雑性を避ける為、天皇及び皇族の敬称は省略し、丁寧語や尊敬語は原則として使用しない。しかし、丁寧な語句や言い回しが一般化し、筆者が使用せざる事により不自然が生ずる恐れがあると判断する場合はこの限りではない。例えば、「御製」、「お題」、「御下問」、「勅語を賜る」等として使用する。又、詠草者にかかわらず歌の題を「お題」と呼称することを予め了承されたい。

３．研究課題

『御製歌「よもの海」』は如何に成立し如何に解釈されてきたか、又、御製歌は何を意味するか。

４．研究課題の説明と意義

『御製歌「よもの海」』は三十一字定型の明治天皇の和歌の一つであるが、御製歌とは天皇が製作した歌の総称である。従って、その形式は必ずしも五七五七七の定型を採用する訳ではない。例えば、明治天皇は 1896（明治 29）年、五七調七十九文字の「よもの海」を詠じている。[(2)] しかし、『古事記』、『日本書紀』には既に「五七調の歌謡が多」く、時代が下るに五七調が定着した。谷知子はその

著書『天皇たちの和歌』に於いて、和歌の形式を論じ、『古今集』序文の重要性を指摘して、「天上世界から降臨したスサノヲという神が（定型の）和歌を初めて詠んだという（古今集の）認識は、国家の形成と和歌の始発がほぼ同じ論理」と書いている。(3) 谷は歴代天皇の国家観、世界観を御製歌に読み取りつつ、近代天皇が皇祖皇宗を崇敬しつつ詠じた御製歌を紹介している。又、岡野弘彦は御製歌の特殊性の一つとして「咒歌」の性質を挙げ、「永い心の伝統に支えられた信仰の年中行事」が「古代の歌謡から、やがて和歌となっ」たと説明している。(4)

和歌は今日日本の伝統文学であると認められるが、本稿に於いてはその芸術的側面を論ずるのではなく、そこに込められた作者の意図を当時の社会情勢から、或いは又、社会情勢から作者の意図を考察せんとするものである。即ち、筆者は和歌を当時の主要なメディアとして捉え、御製歌の作者たる天皇の意図を探るのが本稿の目的である。和歌が本来主要なメディアであり、政治の手段であった事は、先行緒研究が指摘するところである。例えば、中西進は「勅撰集」の制度自体の政治性を指摘し、『万葉集』を「重要な国づくりの手段であった」と論じている。(5) 中西は、谷が指摘したところの『古今集』は、和歌が重要な政治手段であったことを「証明するもの」であると評している。(6) 筆者はそこで、和歌が昭和期に国体明徴運動の一翼を担った点に注目する。近現代では本来和歌が持つメディアとしての価値が相対的に低下したものの、既に詠まれた和歌を、更に取捨選択の上解説を附す時、本来のメディアとしての価値が恰も絶対的本質の如き印象をまとい、権力の具となるのではあるまいか。品田悦一は 1935（昭和 10）年以降の国語教科書に防人歌が多数認められる点を指摘し、『万葉集』の「恣意的かつ一面的な扱いがまかり通っていた」点を「総力戦の精神的武器」として指弾している。(7) しからば、御製歌の場合も、国民への発表、出版にあたっては、「恣意的かつ一面的な扱い」を疑う余地があるのではなかろうか。

そこで筆者は、『御製歌「よもの海」』に込められた明治天皇の願望、心情、明治天皇の『御製歌「よもの海」』を引用した昭和天皇の願望、心情を、御製歌の歴史の中に読みとらんとするものである。しかし、国難に際し決断を迫られる天

皇の心情は、人として、一族の長として、又国家の統率者として、多様な葛藤があったであろうと想像される。その「多様な感情」こそ和歌に遺憾なく表現されるのではなかろうか。ツベタナ・クリステワはその著書『心ずくしの日本語』に於いて、和歌の内容や表現の曖昧さは避けられるべきとしつつも、「意味や解釈は多様であって、絶対的なものではない。なぜなら、歌に表現された世界自体が『あいまい』であるからだ」と書いている。[8] その「あいまい」さが如何に解釈されてきたか、「よもの海」の歴史と共に、その解釈の歴史を明確にする事は、日本国民の国家観、世界観、戦争観の変化を論ずる上で有意義であろう。

５．日露戦争と御製歌

５．１．ドナルド・キーンの考察

日清戦争後、朝鮮半島を勢力圏に収めた日本は、1900（明治 33）年、華北に勃発した義和団事件の排外的暴動鎮圧の為、八カ国連合軍の一部として陸軍を派遣した。[9] 義和団事件以降、中国大陸では列強の権益が衝突することとなるが、同事件に際しロシアは満洲に侵攻、同地を占領した。ロシアは、1902（明治 35）年 4 月、清国と満州還付協約を締結、三期分割撤兵を約したが、一期以降履行されなかった。加えて、翌 1903（明治 36）年 5 月にはロシア軍が「鴨緑江を越え大韓帝国領内の龍巖浦に軍事根拠地の建設を開始」した。[10] これにより日露間の緊張は極度に高まり、1904（明治 37）年 2 月 5 日、日本はロシアに対し国交断絶を通告、同月 8 日戦端を開いた。[11]

以上が日露開戦経緯の概略であるが、当時の日本経済は、対露戦争遂行に臨める状況ではなかった。『侯爵松方正義傳』によると、「必要なる巨億の軍費を支出するの餘裕無く、其の財源は首[ママ]として之を内外債の募集に待たざるを得ざる狀態であった」。[12] そこで外務大臣小村寿太郎は、断交の 36 日前の 1903（明治 36）年 12 月 31 日、駐英公使林董宛て、英国への財政的援助要請の訓令を出している。小村は同訓令に「戰費ニ關スル事項ノ軍事上ノ準備ト相伴ハサルハ帝國政府ノ之ヲ否ムヲ得サル所トス」と経済的苦境を述べている。[13]

かかる経済状況の下、明治天皇の憂慮は甚大であったと推測される。ドナルド・キーンはその著書『明治天皇』に於いて、「これら高まる緊張の数ヶ月間、天皇は戦争の可能性に心を奪われていた」と書き、次の御製歌を引用している。(14)

民のため　心のやすむ　時ぞなき　身は九重の　内にありても

これは 1903（明治 36）年、「をりにふれて」の御製歌である。更にキーンは続けて次の御製歌を引用している。(15)

苔むせる　岩根の松の　よろづよも　うごきなき世は　神ぞもるらむ

これは 1904（明治 37）年 1 月 20 日の御歌会始に於ける御製歌で、お題は「厳上松」である。(16) キーンはこの御製歌を「目前に迫った戦争での日本の安全を祈念したものと解釈していいほど両義的」と評している。(17) 更にキーンは「天皇の苦悩を暗示」している御製歌として次の一首を引用している。(18)

思ふこと　多きことしも　鶯の　聲はさすがに　またれぬるかな

一方、『御製歌「よもの海」』は、1904（明治 37）年日露開戦を前に、明治天皇が戦争を憂慮する心情を詠草したとされるが、キーンの『明治天皇』に於いては触れられていない。キーンは明治天皇の世界情勢を「憂慮」する心情に焦点を当てたのではなく、「苦悩」に焦点を当て御製歌を引用したと思われる。

５．２．松本健一による『御製歌「よもの海」』が詠まれた日

松本健一は、明治「天皇の心配」を示唆する御製歌として、第一に『御製歌「よもの海」』に注目している。松本はその著書『明治天皇という人』に於いて「天皇の心配」の小見出しの下、「明治三十七年二月四日、日本政府はロシアに対し

て戦端をひらくことを決定した」と書き、続けて『明治天皇紀』を引用、更に春畝公追頌會『伊藤博文傳』より2月4日の項を文頭から次の如く引用している。「四日払暁、公（伊藤）は即刻参内せよとの召命に接し、ただちに参内したるに、天皇はご寝衣のままにて常の御殿に公をご引見あらせられ」。[19] 更に続けて前文の解説をしている。松本はその解説文の最後に「このとき天皇が詠んだ歌は、開戦を決断した天皇の揺れ動く真情を忠実に物語っていた。四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」と書いている。[20] 松本の記述にある「このとき」は必ずしも「四日払暁」を限定するものではない。しかし、松本の記述は、明治天皇が2月4日の早朝、伊藤の眼前で『御製歌「よもの海」』を詠じたかの如き印象を与える事を免れないのではなかろうか。

6．『御製歌「よもの海」』が詠まれた日

松本の説は、『御製歌「よもの海」』詠草の日付を1904（明治37）年2月4日と示唆し、その根拠を春畝公追頌會『伊藤博文傳』に求めている。「春畝」とは伊藤博文の号で、同書は書名に「傳」を附すも第三者による伝記ではなく、伊藤の日記、書簡等をまとめた書籍であり、実質上、伊藤の自著と言える。[21] 筆者は基本的に松本説に同意するが、春畝公追頌會『伊藤博文傳』に当該御製歌に関する記述は無い。そこで、本節では同書の他、『明治天皇紀』、『桂太郎自伝』、『寺内正毅日記』の記述内容より『御製歌「よもの海」』が詠まれた具体的日付、時間と状況を探求する。

まず、宣戦の詔書の日付が1904（明治37）年2月10日付である故、明治天皇が「安全を祈念」した同年1月20日より2月9日までが『御製歌「よもの海」』の詠草期間として推定されるであろう。この期間中、筆者は次の四日を詠草日候補として注目する。即ち、1月30日、2月1日、3日、4日である。

まず注目すべき日付が1月30日である。『明治天皇紀』の同日の記録に、「樞密院議長侯爵伊藤博文・元帥侯爵山縣有朋・内閣總理大臣伯爵桂太郎・海軍大臣男爵山本權兵衛・外務大臣男爵小村壽太郎の五人總理大臣官舎に會し、時局に關

して協議する所あり、席上、博文一案を草し、四人に回示して以て決斷の時至れることを說く、その文に曰く」とあり、全文を引用している。[22] 伊藤はそこでロシアの政策、日露関係を分析した上で、「露ト干戈相視ルハ早晩免ルヘカラサルモノタルハ火ヲ見ルカ如シ然レハ我國力ノ不足ニ顧ミ……國家ノ運命ヲ懸テ……一刀兩斷ノ決ヲ爲サヽルヲ得サルノ境遇也」と書いている。[23]

次に注目すべき日付は2月1日である。参謀総長の大山巌が上書し、ロシア軍の戦備状況を報告、曰く、「露國の戰意既に明瞭にして、極東に兵力を增强しつつある今日……速かに我より戰端を開き、以て先制の利を獲得せざるべからざること」。[24] しかし、当該日の記述内容はロシア軍の詳細な戦力配備の報告のみである。従って、明治天皇の憂慮が深化した事は想像されるが、『御製歌「よもの海」』が詠じられたとはいささか考え難い。

次が2月3日である。内閣総理大臣桂太郎と外務大臣小村寿太郎が午後3時から午後4時30分まで内廷で天皇に拝謁し、「露國と戰の避くべからざるに至れるの事情を具奏し……御前會議を開きて之れを決したまはんことを」奏請している。[25] しかし、続く記述には「乃ち是の日朝來樞密院議長侯爵伊藤博文・元帥侯爵山縣有朋・參謀總長侯爵大山巌・伯爵松方正義・同井上馨及び海軍大臣男爵山本權兵衛・外務大臣男爵小村壽太郎・陸軍大臣寺內正毅の八人と總理大臣官舍に會し……遂に開戰の已むべからざるを議決す、蓋し太郎は壽太郎と此の議決を携へて參內し、明日の事を奏請せるなり」とあり、「蓋し」以下の記述からは明治天皇の驚愕や慨嘆は想像し難い。[26]『伊藤博文傳』によると、1月30日の会議は出席者全員伊藤の意見に同意し、更に2月3日、伊藤以下「山縣、松方、大山、井上の五元老、並に桂、山本、曾禰、寺內、小村の五相は、再び首相官邸に會合し……敢然干戈に訴ふるの外なしといふに一同の意見が合致した」とあるから、明治天皇が得た2月3日の情報は先の1月30日の情報とほぼ同じ筈である。[27] 従って、筆者は3日に別段驚愕や慨嘆は無かったであろうと想像する。3日に明治天皇が『御製歌「よもの海」』を詠草したと仮定するならば、桂と小村の拝謁以前の時間に詠じたと考え得るが、『明治天皇紀』にはそれを窺わせる記述が無く、

同日のその後の記録は、神社の競馬会や祭典への下賜金や記念碑建設の為の下賜金の記録で、寧ろ、読者は明治天皇が平静な一日を過ごしたが如き印象さえ受けると思われる。3日の記述は寧ろ、翌4日の重要性の示唆であると理解すべきではなかろうか。

2月4日は最も注目される日付である。『明治天皇紀』によると、桂内閣首脳は午前10時30分より対露政略を論議し、午後2時25分には既に伊藤を筆頭とし諸元老も御座所に明治天皇を待った。明治天皇は感冒により体調は不順であったがこれに臨席、「會議二時間餘……議事四時三十分を以て終」了している。(28) しかし、『明治天皇紀』によると、明治天皇は、同日「午前十時三十分特に博文を內廷に召して」「豫め其の意見を徵し」ている。(29) つまり、明治天皇は2月4日、まず払暁に伊藤を呼び意見を聞き、更に午前10時30分に伊藤を呼び意見を聞いた上で、午後2時25分から4時30分までの御前会議に臨席したと推定し得る。(30) 当該御前会議について、首相桂太郎は「事此に至りて異論の出づべき理由もなく……満場一致戦を開くに決し」た、と自伝に書いている。(31) しかし『伊藤博文傳』では、この時明治天皇は「暫し宸慮あらせられ、今日迄の交渉は兩國政府間に限られたれば、この上は睦躬ら親電を露帝に送りて疏通の道を開き、以て両國の生靈を戰禍より救はんとすとの思召を洩らさせ給」ったが、「その餘裕なき事情を聞召さるゝに及び、竟に決議通り御裁可あらせられた」と、明治天皇の躊躇を記述している。(32) 本来御前会議中に天皇が発言する機会は僅少である上、両書の記述より、当該御前会議に於いて明治天皇が『御製歌「よもの海」』を詠草したとは考え難い。もし御前会議に於いて詠草されていたならば、『伊藤博文傳』にその旨の記述が無いのは不自然ではなかろうか。又、当該御前会議終了直後も、「日露交渉ニ關スル事件ニ付臣等蒙諮詢臣等深思熟慮ノ後今日ノ狀勢他ニ執ルヘキノ途ナキト信シ內閣上奏ノ意見ヲ御裁可被爲在ノ外之ナキコトニ一致茲ニ謹テ覆奏ス」と五元老の覆奏があった故、『御製歌「よもの海」』が詠まれた可能性は考え難い。(33)

上述の如く対露開戦は決定されたが、同日の夕刻、明治天皇は深い遺憾の意を

洩らしている。『明治天皇紀』によると、明治天皇は夕刻内廷に入った後、左右の侍従等を顧みて、「今回の戰は朕が志にあらず、然れども事既に茲に至る、之れを如何ともすべからざるなりと」と言い、更に独り言の如く、言葉も途切れつつ、「事萬一蹉跌を生ぜば、朕何を以てか祖宗に謝し、臣民に對するを得ん」と、言うや否や涙をはらはらと流した。(34)

しかし、翌5日以降、明治天皇は淡々と、寧ろ精力的に政務をこなす。例えば、2月5日は午前11時過ぎより海軍大臣山本權兵衛、海軍軍令部長伊藤祐享、海軍軍令部次長伊集院五郎、参謀総長大山巌、参謀本部次長兒玉源太郎、陸軍大臣寺内正毅と次々に陸海軍首脳に拝謁させている。そして、ロシアに対し既に最後通牒が発せられ、正に戦闘開始が迫りつつある同日夕刻、明治天皇は「朕は卿等ノ忠誠勇武ニ信頼シ其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全[ママ]クセムコトヲ期ス」と勅語を賜っている。(35)

陸軍大臣寺内正毅は、2月5日付の日記に「勅語ハ明日午前十時半ニ宮中ニ於テ正式ニ玉[ママ]フ筈ナリ」と書き、翌6日の日記に「午前十時三十分参内陛下ヨリ……勅語ヲ玉[ママ]フ」と記している。(36) 寺内の記述は、明治天皇が、正に淡々と政務を執った事を裏書きしているようである。

更に2月7日に至っては、「是の日日曜に丁るも、天皇御座所に出でて政務を視たまふこと平日の如し」と記録されている。(37)『明治天皇紀』は2月8日付で日露艦艇同士の戦闘を既に記録している故、同日以降の記録を精査する必要は少なかろう。

以上1904年1月30日、2月1日、3日、4日の記録より、筆者は先の松本健一の説、即ち、『御製歌「よもの海」』は1904年2月4日に詠まれたとする説に、基本的に同意する。しかし、筆者は以下の如く、より詳細にその状況を推定する。

即ち、1904年2月4日の夕刻、内廷に於いて、皇祖皇宗に対する慙愧の念と臣民に対する遺憾の念、加えて勝敗に対する不安の入り混じった御し難き心境の下、明治天皇は『御製歌「よもの海」』を詠草した。換言せば、明治天皇は私的空間に於いて、一族の長としての心情、日本の統治者「天皇」としての心情、そ

して軍の統帥者「大元帥」としての心情に翻弄され、私と公の葛藤の末、最後に歌として発したものが『御製歌「よもの海」』であったと推測する。

又、詳細は後述するが、筆者は昭和天皇の 1941（昭和 16）年 9 月 6 日の御前会議に於ける行動が筆者の説の根拠を補完すると考える。即ち、もし明治天皇が 1904（明治 37）年 2 月 7 日の御前会議に於いて『御製歌「よもの海」』を詠草したのであれば、昭和天皇も 9 月 6 日の御前会議に於いて開戦反対の御製歌を詠じたのではなかろうか。さもなくば、昭和天皇が『御製歌「よもの海」』を予め紙片に書き写すという準備をした上で御前会議に臨席した意味は理解し難い。

７．「よもの海」の意味変化の歴史

７．１．基本的意味、所収歌集と表記

明治天皇は和歌の道に通じ、生涯に公称 9 万 3032 首の御製歌を詠草した。[38] 明治神宮編の『類纂新輯明治天皇御集』では『御製歌「よもの海」』を、第三章「邦國」の下部、第七節「世界」に分類している。[39] 当該御製歌が詠まれた日露開戦必至の国際状況、政治状況を考慮すると、「よもの海」なる語句が「世界」を表す語として無意識のうちに、明治天皇の脳裏に浮かんだと考えるのは至当であろう。しかし、前近代に於いては、その世界観は明治期のそれと異なっていた筈である。

そこで、「四方（よも）」及び「四方の海（よものうみ）」を角川『歌ことば歌枕大辞典』により調査したところ、それぞれの語の第一義は「東西南北」並びに「東西南北すべての海」であった。[40] 前者は他に「前後左右」、「まわり」、「しほう」、「ぐるり」、「あちらこちら」、「いたるところ」、「諸方」と併記され、用法として「広がりの中で自然や植物、人事などを総体としてとらえ歌う」と説明されている。後者、「四方の海（よものうみ）」の説明には、「海の広さを強調する表現」と記述され『新勅撰集』より藤原俊成の「よもの海」、即ち「四方の海を硯の水に尽くすとも我が思ふことは書きもやられじ」を例に挙げている。又、付加的説明として、「国内・国中の意を表すことがあ」るとして『新拾遺集』より後

醍醐天皇の「よもの海」、即ち「四方の海をさまりぬらし我が国の大和島根に波しづかなり」を例に挙げている。(41) 同辞典の説明が示唆するところは、「よもの海」なる語の物理的、心理的両面に於ける全方向性、及び政治的な統治権の範囲又は天下であり、諸外国乃至は今日的意味に於ける「世界」を示唆する記述は無い。

又、『日本国語大辞典』は「よも」の第一義に「(ある所を中心として)」と条件付けた上で、「東西南北」、「前後左右」、「しほう」、「まわり」、「ぐるり」を挙げ、第二義に「あちらこちら」、「諸方」、「いたるところ」、第三義に「よも（四方）の赤の略」を挙げている。(42) 又同辞典は「よもの海」を、「四方のうみ」、「四海（しかい）」とのみ換言している。

そこで「四海」を大修館『大漢和辞典』で精査したところ、以下の八義が示された。(43) 即ち、一「四方の海」、「四溟」、二「四方のうみの内」、「天下」、「四宇」、三「東海・西海・南海・北海」、四「北方幽陵・南方交趾・西方流沙・東方蟠木」、五「西の流沙・南の衡山・東の東海・北の恆山」、六「四方のえびす」、「九夷・八狄・七戎・六蠻」、七「人體に有る四つの海」、「體海・血海・氣海・水穀之海」、八「ssŭ^4 hai^3 事に拘泥せぬ。世馴れた」である。第七及び第八義は例外として、他は華夷秩序下の周辺地域を示唆しているが、現代的意味の外国乃至は「世界」とは異なる。三省堂『大辞林』も第一義は前掲『大漢和辞典』と同じである。(44) しかし第二義に於いて、以下の如く「世界」が登場する。即ち、二「国内」、「天下」、「世の中」、「世界」。同辞書は同語の例文として、「征夷大将軍の跡を継がしめ以て―に号令せり／日本開化小史」を挙げている。しかしながら、同例文中の「四海」は、「天下」乃至「世の中」と解釈可能で、現代的意味の「世界」に当るか否かは疑問の余地がある。又、現代的意味に於ける「世界」であると仮定しても、『日本開化小史』は 1877 年から 1882 年にかけて出版された歴史書である故、「四方」の用法としては近代的と言えるのではなかろうか。

そこで、近代以前の和歌を『国歌大観』で調査し、「よもの海」の起源を探り、その意味の変化を検証することとする。(45) もし、近代以前の和歌に「諸外国」、「世界」を意味する「よもの海」が存在するならば、それが示唆するところは文化的、

地政学的に考え、中国、印度、蒙古及び朝鮮半島が推察されるであろう。但し、『国歌大観』による和歌の調査にあたり、後年に成立した歌集の中には前年に成立した歌集からの収載がある点を予め了承されたい。

まず、平仮名漢字等の表記の形式如何に関わらず「よもの海」を検索すると、132 件が検索結果として表示された。又、語句として「よもの海」を含む和歌を所収する歌集は 80 件で、鎌倉時代の作が多く、平安時代以前と安土・桃山時代の作は認められなかった（表 1 参照）。更に、*yomonoumi* を以下の四つの表記法、即ち、「四方の海」、「よものうみ」、「よもの海」、「四方のうみ」別に検索し、更に「歌集と解題」、「歌集のみ」、「和歌・漢詩」の三つに分類した（表 2 参照）。その結果、*yomonoumi* は「四方の海」と表記するものが最も多く、次いで、僅少差で全仮名表記の「よものうみ」が多い事が明らかとなった。近代以前の和歌に於ける表記上の差異を論ずる事に筆者は意義を見出さないが、本稿「10. 佐々木巴陵の暗号」に於いて明治天皇『御製歌「よもの海」』の漢字表記を検討する。その為の準備手段として、本節に於いては *yomonoumi* の表記上の差異を指摘する。

表1：年代順「よもの海」を含む歌集と件（首）数

平安時代	1.　安法法師集：1	鎌倉時代	41.　続後撰和歌集：1
	2.　宇津保物語：1		42.　続古今和歌集：1
	3.　馬内侍集：1		43.　前長門守時朝入京田舎打聞集：1
	4.　紫式部集：1		44.　柳葉和歌集：2
	5.　和泉式部続集：1		45.　閑月和歌集：1
	6.　大斎院前の御集：2		46.　国冬五十首：1
	7.　斎宮貝合：1		47.　隣女集：1
	8.　江帥集：1		48.　歌枕名寄：1
	9.　金葉和歌集二度本：2		49.　亀山院御集：1
	10.　金葉和歌集三奏本：1		50.　夫木和歌抄：5
	11.　散木奇歌集：3		51.　続千載和歌集：1
	12.　顕輔集：1	室町時代	52.　玄恵追善詩歌：1
	13.　長秋詠藻：3		53.　延文百首：2
	14.　風情集：1		54.　続草庵集：1
	15.　成仲集：1		55.　公賢集：1
鎌倉時代	16.　長秋草：1		56.　新拾遺和歌集：2
	17.　文治六年女御入内和歌：1		57.　六華和歌集：1
	18.　俊成五社百首：1		58.　仙洞歌合　崇光院：1
	19.　玄玉和歌集：1		59.　李花和歌集：1
	20.　御室五十首：1		60.　永享百首：2
	21.　正治初度百首：1		61.　雅世集：2
	22.　正治後度百首：2		62.　正徹千首：1
	23.　石清水若宮歌合：1		63.　草根集：6
	24.　老若五十首歌合：2		64.　題林愚抄：3
	25.　粟田口別当入道集：1		65.　歌合　文明十六年十二月：1
	26.　守覚法親王集：1		66.　松下集：3
	27.　千五百番和歌：4		67.　閑塵集：1
	28.　秋篠月清集：5		68.　柏玉集：2
	29.　百詠和歌：1		69.　春夢草：1
	30.　新古今竟宴和歌：1		70.　称名院集：1
	31.　道家百首：1		71.　義経記：1
	32.　明日香井和歌集：1	江戸時代	72.　挙白集：2
	33.　拾玉集：4		73.　逍遊集：2
	34.　洞院摂政家百首：1		74.　草山和歌集：1
	35.　拾遺愚草：3		75.　大嘗会悠紀主基和歌：7
	36.　新勅撰和歌集：1		76.　為村集：1
	37.　壬二集：2		77.　桂園一枝：1
	38.　拾遺愚草員外：1		78.　八十浦之玉：1
	39.　後鳥羽院遠島百首：2		79.　柿園詠草：1
	40.　宝治百首：2		80.　大江戸倭歌集：3

表 2：*yomonoumi* 表記方法

	四方の海	よものうみ	よもの海	四方のうみ
歌集と解題	54	52	33	12
歌集のみ	54	49	33	12
和歌・漢詩	49	43	32	12

７．２．平安時代

平安時代に詠まれた「よもの海」は表 1 の 1 番より 15 番までの 15 和歌集、21 首に認められる。同表に示した如く、「よもの海」なる語句が和歌に於いて使用された最古の例が『安法法師集』に見られ、平安時代以前には認められない。(46)『国歌大観』の解題によると、同集の成立年は不詳で、安法法師も「生没年未詳」、「村上―花山朝の人」とされる。(47) 村上天皇［926－967］の在位が 946 年から 967 年、冷泉天皇［950－1011］、円融天皇［959－991］を経て、花山天皇［968－1008］の在位が 984 年から 986 年である。従って、同集は 900 年代後期に成立したと推定し得る。又、当該和歌は「正月一日」から「九月」までの期間に詠草されており、「正月一日」の前年には「天元二年、大風ふき大水いでて、みな木もなく池もうづもれてのちきみのとへよむ」和歌が所収されている。(48) 故に筆者は、当該和歌は 980（天元 3）年 1 月から 9 月（旧暦）の期間に詠まれたと推定する。当該和歌を以下に引用する。(49)

よもの海に　としふるあまの　かりいずる　ももいとかくは　みだれざるらん

当該和歌は、「大宮のすけの君、ひはだ色の打物を法師のためにかりて返すとて、破れたりけるを」と記されており、「ひはだ色の打物」即ち「法師」が身につける裳を、老齢の海人が海から刈り出した藻に喩えて詠じたものである。従って、「よもの海」は、現実的存在ではないが、第一義的に海人が藻を刈る事の出来る現実的海を意味しなくてはなるまい。即ち、「よもの海」は世界を意味するものではなく、辞典通り、眼前に広がりたる海原を意味しているであろう。

成立年不詳であるがほぼ同時期に成立したと推測される『馬内侍集』（表1参照、3番）所収の和歌も以下に引用する。馬内侍は生没年不詳だが、『国歌大観』の解題では950年前後の出生で、家集は970年前後からの歌稿を集めたものと解説している。(50)

たのめくる　君しつらくは　四方の海に　身もなげつべき　心ちこそすれ

上記の和歌も「四方の海に」身を投じてしまいたい程の心情を詠じている故、「四方の海」は物理的に身を投じ得る海でなくてはなるまい。高橋由紀は「期待させるあなたが薄情ならば、私は四海に身を投げてしまいたい気持ちになります」と現代語訳を附している。(51) 従って、当該和歌中の「四方の海」は第一義的に海を意味すると解せる。しかし、現実的存在としての海ではない。

次に、やや意を異にする例を『散木奇歌集（俊頼）』より引用する。『国歌大観』は同和歌集の成立年を1127年から1131年とする説を採用している。(52)

よもの海に　たとふる国の　かたなれば　心もにしへ　なみよりにけり

当該歌集は1162首の和歌を所収し、内、780番から994番までの悲歎部では仏教に関連した極楽観、浄土観を詠じている。上記の和歌には「よろづによき事のほとりもなきさまなん海のごとくにあるといへる事をよめる」と記されている故、「ほとりもなきさま」の喩えとして「よもの海」を挙げている。(53) 従って、当該和歌に於ける「よもの海」は現実的存在の海ではなく、「海の如くに広く大きな存在」を意味すると解せる。

鎌倉時代以前の和歌に於いて「海」を意味しない例として、『成仲集』所収、祝部成仲の次の和歌に注目したい。(54)『成仲集』の成立年は明示されていないが、平安末期の成立と考え得る。『国歌大観』の解題は五つの伝本を同系統と紹介し、祝部成仲を1099年誕生、1191年没と解説している。(55)

よものうみ　くまなくてらす　きみなれば　ますみのかがみ　なににかはせん

当該和歌は「楽府歌」に分類され、お題は「百練鏡、四海安危照掌内」である。

先の『安法法師集』、『馬内侍集』に於いて、それぞれの「よもの海」が現実的存在の「海」を第一義としたと解せる一方、『散木奇歌集』に於いては「なみよりにけり」が唯一現実的海を連想させる。『成仲集』の当該和歌は現実性を連想させる語句が見出し得ない。当該和歌中の「よものうみ」は「きみ」が「くまなくてらす」対象でなくてはならぬ故、その意味するものは「海」ではなく、「きみ」が統治するところの「国土」と理解され得る。『歌ことば歌枕大辞典』に於ける付加的説明の「国内・国中の意」と理解してよいであろう。

しかし、この他には、鎌倉時代以前の和歌に於いて、「よもの海」は現実的存在の海を連想させる語句、殊に「あま」と共に用いられる場合が多い。1185 年の鎌倉幕府成立以前に詠まれた「よもの海」は 21 首認められるが、内 5 首が海で漁をする「あま」と共に詠まれている。鎌倉時代以前に於いて「よもの海」は第一義的に現実的存在としての海そのものを強く連想させる傾向が認められる。

７．３．鎌倉時代

鎌倉時代になると「よもの海」を詠じた和歌は激増する。表 1 の歌集で見ると、16 番『長秋草』から 51 番『続千載和歌集』までの 35 集が鎌倉時代の歌集であり、全体の約 43.75% に相当する（表 1 参照）。又、首数では「よもの海」132 首中、58 首が鎌倉時代に詠まれており、約 43.94% に相当する。

構成語句の第一の特徴として「波」又は「浪」の頻出を挙げ得る。平安時代に詠まれた「よもの海」は 21 首あり、内 6 首が表記の如何に拘らず「波」を含んでいるのに対し、鎌倉時代の「よもの海」は、58 首中 33 首に *nami* が含まれている。表記の如何に拘わらず、鎌倉時代の「よもの海」総数の約 56.9% が「波」なる語句を伴い詠じられている。

第二の特徴として、漢字、平仮名等の異種表記を問わず「風」の頻出を挙げ得

る。平安時代の「よもの海」は「風」を含んでいないが、鎌倉時代の「よもの海」は、14 首が「風」（内、平仮名表記 3 首）を含んでいる。これは鎌倉時代の「よもの海」総数の四分の一弱（24.13%）を占める。更に、その 14 首中、表記の如何に拘わらず「風」と「波」を同時に含む「よもの海」が 12 首認められる。

現代でも揉め事や社会に於ける辛い事を「波風」の比喩を以て表現するが、鎌倉時代の和歌に於いても同様の比喩の使用が認められる。殊に『前長門守時朝入京田舎打聞集』所収の次の和歌に於ける用法は、現代文に於ける用法と同様であり、「波風」としての使用は、鎌倉時代の「よもの海」としてはこの 1 首のみである。[56]『国歌大観』の解題は、同和歌集の成立を 1259 年 8 月 15 日以降 1265 年 2 月 9 日以前としている。[57] 当該和歌の 5 首前の和歌に「嘉禎三年春ころ……よみ侍りける」とあり、「秋」の中に「正元元年八月十五日夜会に……よみ侍る」和歌がある。[58] お題は「賀歌」である。

よもの海に　波風たたぬ　みよなれば　いでたる舟の　かずもしられず

通釈は「四海に波風の立たない、平和で豊かな、いつまでも続く御代だから、漕ぎ出ている海士の舟の数も多くてわからないほどだ」としてしる。[59]

「みよ」とは治世であるから、「波風たたぬみよ」は平穏な世を意味する。即ち、ここでの「よもの海」は『歌ことば歌枕大辞典』にある「国内・国中の意」と理解し得る。かように、意味内容的に鎌倉時代の「よもの海」は、政治的治世、地理的国土、現実的社会等を示唆する傾向が一層強くなる。更に、『玄玉和歌集』所収、僧静賢「寄神述懐」や『正治後度百首』所収の「神祇」は統治の政治的正当性を意味すると解せる。当該二首を以下に引用する。[60]

さざ浪の　声もあらずな　よもの海に　あきつ島もる　神ならば神
四方の海の　なみをしづめて　跡たるる　神やさながら　あきつ島守り

当該和歌は二首とも海を連想させる「浪」又は「なみ」を使用している。従って第一義的に「よもの海」は現実的海を意味し、「国内・国中の意」と解せる。しかし、当該和歌二首の主題は、あきつ島を守るところの統治者である。故に筆者は、「四方の海」を現実的海と仮定しても、精々国土の周囲の海、沿岸、現代的意味の領海よりも狭い範囲を意味すると推察する。

「よもの海」が現実的社会を意味する例として、筆者は『後鳥羽院遠島百首』より後鳥羽天皇［1180－1239（在位 1183－1198）］の御製歌を次に引用する。[61]『国歌大観』の解題によると、「多数の本文異同」が認められる伝本は 60 本以上現存、「隠岐御百首」、「隠岐百首」等の呼称も存在する。[62] 名称の示す通り、「承久の乱によって配流された後鳥羽上皇が隠岐島で詠んだ百首歌」である。[63]

ちはやぶる　日よしの影も　のどかにて　浪をさまれる　よもの海かな
四方の海の　浪につりする　海士人も　をさまれる代の　風はうれしや

前者は「正治二年八月御百首」、「祝五首」の一首で、後者は「建仁元年三月内宮御百首」、「祝五首」の一首である。寺島恒世の解説によると、「神の恵みによる国土の安定を歌」った和歌である。[64]

後鳥羽天皇は高倉天皇の第四皇子であるが、高倉天皇の第一皇子であった安徳天皇は平氏方の表象とされ、平宗盛に擁され神器とともに遁走した。1132 年 8 月、後白河法皇の詔により後鳥羽天皇が即位し、1135 年まで安徳、後鳥羽の二人の天皇が並立した。安徳天皇は 1135 年、八歳にして三種の神器とともに壇ノ浦に入水している。1196 年、朝廷内に政変が勃発し、1198 年より後鳥羽天皇は院政を開始、鎌倉幕府との対立を深めた。後鳥羽天皇の治世は鎌倉幕府との権力闘争の時代であった。「四方の海の　浪につりする……」は 1201 年の御製歌で、お題は「祝」である。表面上は、隠岐に於ける、隠遁生活の喜びを詠じたものと理解されるが、同時に、反幕府の祈念、咒歌として理解され得る。寺島は「慈円・良経の歌を踏まえ、諸国の安定を歌う」と解説している。[65]「諸国」の意が「緒外国」

でないことは言及する迄もなかろう。

二首共に「浪」を詠み込んでおり、しけた海を連想させる。更に「おさまれる」が共通しており、筆者は「浪をさまれるよもの海かな」は「治まれる世」乃至「治まれる代」を暗示していると推察する。当該御製歌の「よもの海」は、「浪」がおさまるべき「よもの海」であるから、第一義的には現実的「海」を意味すると解す事も可能である。しかし、当時の政治状況を考慮し、又、二首を比較する事により、「浪」は海面の物理現象を意味するものではなく、社会的、政治的混乱を示唆すると理解し得る。

一方、「四方の海の　浪につりする……」は、「浪」、「つり」、「海士人」と現実的海を連想させる語句が三つ詠み込まれている。しかし、前者の場合の如くに推測する迄もなく、「をさまれる代の風」が主題である。筆者は、この「をさまれる」は「治まれる」として「代」を修飾すると同時に、「収まれる」として「風」を修飾する掛け詞と理解する。即ち、筆者は「をさまれる」を後鳥羽天皇に対する反対勢力の収束を意味すると考える。かように考えれば「海士人も」が説得力を持つであろう。風が収まる事は沿岸漁業従事者にとり喜ばしい事は論を俟たないからである。

７．４．室町時代

室町時代に於いて「よもの海」は 20 歌集 34 首へ減少する。鎌倉時代と比較し、歌集数で 15 減（-18.75%）、首数で 24 減（約 -18.18%）である。しかしながら、室町時代の「よもの海」に於いて、表記の如何に関わらず「波」の使用が 20 首認められる。その数は室町時代の「よもの海」総数の約 58.82% に相当する。僅少ではあるが、「波」の含有率は鎌倉時代のそれ（56.9%）より上昇している。

更に、室町時代の「よもの海」の特徴として、「風」の増加が挙げられる。34 首中 11 首が「風」（内、平仮名表記 3 首）を含み、「風」含有率は約 32.35% となり、鎌倉時代のそれ（24.13%）を大きく上回る。内、前項「7. 3. 鎌倉時代」に挙げた如く、表記の如何に拘わらず「波風」として使用される例が 4 首認められ、鎌

倉時代の 4 倍となる。

室町時代に「波風」を含んだ最初の和歌は宗良親王の家集、『李花和歌集（宗良親王）』に認められる次の和歌 1 首である。[66]『国歌大観』の解題によると、同和歌集の伝本は多く、諸本は「元禄四（1691）年一二月」の奥書を有している。[67] 又、宗良親王は 1311 年生、没年未詳であるが、元弘の変による隠岐への流刑を挟み二度天台座主に就いている。更に「建武の中興に失敗の後還俗して南朝陣営に加」わり各地を転戦、1373 年に吉野帰参、「新葉集の撰集に従事し、弘和元年奏覧」と記されている。[68]

四方のうみの　なかにもわきて　しづかなれ　わがをさむべき　うらの波風

当該和歌は親王が「興国三年越中国にしみ侍りし」後に詠まれており、「東夷を征すべき将軍の宣旨下されて、東山東海のほとりに籌策をめぐらし侍るひまに、題をさぐりて歌よみ侍るとて、寄海祝を」とあり、同和歌の次の和歌には「建徳二年九月廿日、鎮西より便宜に」と付されている。[69] よって、筆者は当該和歌を 1330 年頃の詠草と推定する。

当該和歌の特色として「四方のうみ」が示唆する一種の世界観を指摘したい。「四方のうみのなかにも」は、現代風に言うなら「世界中で」となろう。「わがをさむべきうら」は「領海」に相当すると解せる。当該和歌に於いて、第一義的に海洋を意味する「うみ」と「うら」が現実的存在としての海洋を意味するのではなく、世の中を意味すると考える。『李花和歌集』は所収の和歌に付された日付により、1371 年以降数年内に成立したと考え得る。故に、当該和歌も元寇より 90 年程度後年に詠まれたと推定し得る。しかし、1281 年の弘安の役以後、日本は幕末まで対外的危機を経験しておらず、当該和歌に於ける「四方のうみ」を現代的意味の「世界」、或いは「諸外国」と理解するにはいささか無理があると思われるが、「世界に広がる海の中に於いて」と理解する限りに於いては、従来の「よもの海」よりも近代的意味の世界化を示唆していると言えるのではなかろうか。

二番目の和歌は飛鳥井雅世の家集『雅世集』所収の次の1首である。[70]『国歌大観』の解題によると、当該歌集は4類の伝本があり、内3類に共通歌が全く無く、又4類「所々に重複など不手際」がある。[71]尚、雅世は1390年生、1452年没である。

いにしへも　かかるためしは　四方の海の　波風きて[ママ]　御代ぞ治まる

当該和歌は記録上「永享十一（1439）年七十七日」の詠草、お題は「祝」である。[72]

三番目は後柏原院の家集『柏玉集』所収の後柏原天皇［1464－1526（在位1500－1526）］の御製歌2首である。[73]『国歌大観』の解題は多数の伝本を紹介しており、古い物は1654年以前の成立としている。[74]

浪かぜも　更にしづめて　四方の海も　我が心なる　春やたつらん
波風を　更にをさめて　四方の海も　みな我が家の　春ぞかしこき

前者のお題は「早春海」、後者は「毎家有春」で、両者共に詠草日は不明であるが、両御製歌とも、「四方の海」は天皇が統治すべき「天下」を意味すると解せる。

７．５．江戸時代

安土・桃山時代の「よもの海」が認められない為、室町時代に続いて江戸時代の「よもの海」を検証する。

江戸時代になると「よもの海」は更に減少し、歌集数で8集、歌数で19首となる。又、語句については「波」と「風」の同時使用は1首のみとなり、「波風」としての使用は確認されない。同時代に於いて特筆すべきは『大嘗会悠紀主基和歌』の所収数であろう。『大嘗会悠紀主基和歌』所収の「よもの海」は統計上最高の7首である（表1参照）。『国歌大観』の解題によると、「大嘗会悠紀主基和歌は書陵部に蔵される大嘗会和歌の集成書」で、勅撰集から119首を抜粋、更に仁明天皇［810－850（在位833－850）］より桃園天皇［1741－1762（在位1747－

1762)］までの 1216 首を収載している。[75] 従って、収載された和歌の詠草時代は古代から江戸時代に及び、収載和歌も前年と重複することとなる。例えば、同書収載の「与裳乃海毛　賀久己曾安良女　於久裳川　一日毛波乃　立津時曾無支」は、平安時代の『江帥集』に見られる。[76] 故に、『大嘗会悠紀主基和歌』を「江戸時代のよもの海」として一括して扱う事は不適当である。しかしながら筆者は、「江戸時代中期頃に現在の形に纏められたと推定される」集成書が「よもの海」を最多数収載する事実こそが注目に値すると考える。[77] 即ち、江戸時代も中期になれば、制限下ながらも西洋の文物の流入が増加し、自国領域内に停泊する異国船から、「よもの海」はその外海に広がる海洋、諸外国へと連想され得るのではなかろうか。

江戸時代の「よもの海」に於いて、筆者は 2 首の和歌に注目する。一つ目が『大嘗会悠紀主基和歌』所収の「よもの海」に於いて、最も後年に詠草された次の和歌である。[78]

よものうみの　ほかまでまもる　よにしあれば　いはまのし水　せきのなとせり

従来、「まもる」べき範囲は「よものうみ」とその内側であった。しかし、当該和歌は、「よものうみ」の外側を詠み込んでおり、「よものうみ」は内と外の中間領域を意味していると解せる。

二つ目が『大江戸倭歌集』所収の次の和歌である。[79] 同和歌集の編者は蜂屋光世（号、鶴園）で、『国歌大観』の解題によると、板本が編者蔵の 1860 年刊と、書肆蔵の 1863 年刊がある。[80]「編者の序および跋によれば、文政ごろより見聞のままに書き留めて」「安政の五年冬のはじめ」に題名を付けた和歌集である。[81] 文政元年が 1818 年で安政 5 年が 1858 年である故、所収の和歌は幕末のものである。

四方の海　やしまのほかも　なびく世の　風は都の　空よりぞふく

当該和歌は侍従横瀬貞征の作で、お題は「祝」である。

「やしまのほか」とは日本国の外である。即ち、当該和歌は、朝廷の影響力乃至天皇の威光が国外に及んでいるという意味に解せる。しかし、実際の国際情勢を描写したものではなく、咒歌として限りない理想が詠じられていると理解し得る。又、「四方の海」と「やしまのほか」を同格と仮定するならば、「四方の海」は限りなく現代的意味の「国外」、「世界」に近いものと解し得る。

以上江戸時代の「よもの海」に、筆者は世界観の変化の兆候を読み取る。鎌倉時代から室町時代の「よもの海」は、国土、又は国土の周囲の海等、比較的狭い領域を、世間の比喩として使用されていた傾向がある。江戸時代の「よもの海」に於いても、その意味は継承されているが、次第にそれは従来の範囲の外側の世界にまで及ぶに至る。本節第一項「基本的意味、所収歌集と表記」に於いて指摘したところの『日本開化小史』が明治時代初期に書かれた事実を合わせると、江戸時代に於いて「よもの海」の範囲の今日的意味での「世界化」、換言せば「近代化」の兆候が認められるのではなかろうか。

8．明治天皇二十三首の「よもの海」

昭和天皇が明治天皇の御製歌を引用した如くに、明治天皇が皇祖皇宗の御製や歴史上の歌人の歌を引用した可能性も疑う余地があろう。実際、明治天皇以前の天皇が「よものうみ」という語句を使用した例がある。例えば、小田村寅二郎・小柳陽太郎共編『歴代天皇の御歌』には、後鳥羽天皇［1180－1239（在位1183－1198）］、亀山天皇［1249－1305（在位1259－1274）］、後醍醐天皇［1288－1339（在位1319－1339）］が「よもの海」を詠じた御製歌が各1首所収されている。(82) 又、本稿「7. 4. 室町時代」に於いて引用した『柏玉集』は後柏原天皇の家集である。

後柏原天皇［1464－1526（在位1500－1526）］は和歌活動に精励し、「一説によれば、『歌会始』の原型である『御会始』の起源は、後柏原天皇の時代……であるといわれ」御製歌も「約七千首が現存する」。(83) 後柏原天皇の『柏玉集』は、「実

隆の『雪玉集』、下冷泉政為の『碧玉集』とあわせて『三玉集』と称され」、その近世の宮廷歌壇への影響は高く評価されている。(84) 従って、明治天皇が後柏原天皇を範とした可能性がある。更に、本稿「7. 5. 江戸時代」に於いて取り上げた『大嘗会悠紀主基和歌』は宮内庁書陵部所蔵であり、明治天皇が研究した可能性は高い。

又、明治神宮編の『類纂新輯明治天皇御集』は「御製八千九百三十六首、御歌四千五百八十首を謹撰したもの」であるが、その内、語句として「よもの海」を歌の一部に含むものは 23 首、「よもの海」を発句とするものが 8 首所収されている。(85) 明治以前に詠じられた「よもの海」の総数を『国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 で検索し結果、132 件であったが、明治天皇の「よもの海」23 首はその約 17.4% に相当する。後鳥羽天皇御製歌については重複する事となるが、以下に後鳥羽、亀山、後醍醐の三天皇による「よもの海」を引用し、続いて明治天皇による「よもの海」23 首を『類纂新輯明治天皇御集』より年代順に引用する。当該三天皇については、お題と詠草年を省略する。

後鳥羽天皇御製歌

ちはやぶる　日よしの影も　のどかにて　浪をさまれる　よもの海かな

四方の海の　浪につりする　海士人も　をさまれる代の　風はうれしや

亀山天皇御製歌

よもの海　浪をさまりて　長閑なる　我が日のもとに　春は來にけり

後醍醐天皇御製歌

四方の海　をさまりぬらし　我が國の　大和島根に　波しづかなり

明治天皇御製歌

寄海祝

よもの海　なみのひびきは　しづまりて　萬代よばふ　こゑ聞ゆなり

1884（明治 17）年

池水浪靜

池水の　うえにもしりし　よもの海　なみしづかなる　年のはじめは

1997（明治 20）年

花

よものうみ　波をまさりて　この春は　心のどかに　花をみるかな

1896（明治 29）年

をりにふれて

うつせみの　世の人なみの　春されば　嵯峨山ざくら　秋されば
高雄のもみぢ　折りかざし　たのしぶまでに　四方の海
なみ風たてえて　おだやかに　なりぬる世こそ　たのしかりけれ

1896（明治 29）年

四海清

まじはりの　ひろくなりゆく　よもの海は　波たつ風の　おともきこえず

1902（明治 35）年

寄海祝

波風の　靜かなる世は　四方の海　よわたる舟も　多くなりけり

1902（明治 35）年

新年

外國の　ふねもつどへり　四方の海　なみしづかなる　としのはじめに

1903（明治 36）年

寄海祝

國ごとに　くにをまもりて　よもの海　しづかなる世ぞ　うれしかりける

1903（明治 36）年

海

仇波の　しづまりはてて　四方のうみ　のどかにならむ　世をいのるかな

1904（明治 37）年

述懐

おほづつの　響はたえて　四方の海　よろこびの聲　いつかきこえむ

1904（明治 37）年

四海兄弟

よもの海　みなはらからと　思ふ世に　など波風の　たちさわぐらむ

1904（明治 37）年

四海清

よものうみ　波しずまりて　ちはやぶる　神のみいつぞ　かがやきにける

1905（明治 38）年

をりにふれたる

波風の　ふきしづまりて　四方の海　おだやかになる　時をこそまて

1905（明治 38）年

新年

波風も　しづまり果てて　四方の海に　年のほぎごと　いひかはしつつ

1906（明治 39）年

をりにふれたる

四方の海　しづかになりて　くに民の　こころやすくや　年をこゆらむ

1906（明治 39）年

四海清

まじはりを　むすびかはして　四方の海　なみたたぬ世ぞ　うれしかりける

1906（明治 39）年

述懐

四方の海　波しづかなる　時にだに　なほおもふこと　ある世なりけり

1906（明治 39）年

をりにふれたる

波風は　しづまりはてて　よもの海に　てりこそわたれ　天つ日のかげ

1906（明治 39）年

祝

使人　かたみにやりて　よもの海　しづかなる世に　あれぞうれしき

1907（明治 40）年

商

よもの海　波たたずして　商人の　船のゆききぞ　しげくなりける

1908（明治 41）年

四方の海　しづかなる日に　あへる世は　こころにおもふ　ことなかりけり

1912（明治 45）年

以上の結果より、明治天皇が『御製歌「よもの海」』を詠草した年以前、即ち 1904（明治 37）年以前の御製歌で、語句として「よもの海」を含むものは、『柏玉集』の 2 首を合わせ 17 首確認された。内、明治天皇の御製歌は 11 首である。尤も、明治以前の和歌の中に「よもの海」の御製歌が更に含まれる可能性はある。又、明治天皇が更に多くの「よもの海」を詠んだ可能性も詠草総数と出版発表数より考え、確率的に非常に高い。しかれども、筆者はそれにより明治天皇の『御製歌「よもの海」』の独創性が疑われる事は無いと考える。寧ろ明治天皇の和歌に於ける独創性、或いは威厳性が補強されるのではなかろうか。

９．『御製歌「よもの海」』の分析研究

９．１．近代デジタルライブラリーと「お題」

『御製歌「よもの海」』を国立国会図書館の蔵書数と「お題」から検討する。

明治天皇御製として出版されている書籍の中、「お題」として、「四海兄弟」、又は「四方の海」が付されている場合と、「正述心緒」が付されている場合と、又無題の場合がある。国立国会図書館の蔵書中、書名に「明治天皇御製」を含み、

尚且つ電子版が公開されているもの（近代デジタルライブラリー）は現在 27 点あり、内 12 点が『御製歌「よもの海」』を所収している。[86] 12 点の内、「お題」として「四海兄弟」は 4 点、「四方の海」は 0 点、「正述心緒」は 3 点、無題は 5 点である。[87] 解説として「四海兄弟と云題で」という記述と「『正述心緒』といふ題にて」という記述がそれぞれ 1 点あり、これを合わせると「お題」としては「四海兄弟」が最多となる。尚、「四海兄弟」の意味は「天下の人は皆兄弟のやうに親しい」で、その同義語が「四海同胞」である。[88]

９．２．明治神宮編、宮内省編、宮内庁所蔵原本の「お題」

本稿に於いて筆者が所依とする明治神宮編『類纂新輯明治天皇御集』及びその底本『新輯明治天皇御集』に於ける「お題」は「四海兄弟」であり、後者の常任編集委員で歌人、昭和天皇の侍従長を務めた入江相政氏は同御集の後記に於いて「御原作からは、一語一句も改變するところが無かった」と書いている。[89] 入江氏は「印刷された場合の字づらを考慮して、漢字、かなの配分にも心をくだいた」とも書いており、その意味するところが、語句の表記上の改変を含むか否かは不明である。[90] しかし、「お題」の改変は含まないと解すのが至当であろう。しかしながら、『新輯明治天皇御集』の底本的書籍である宮内省編、文部省発行の『明治天皇御製集』では「お題」が「正述心緒」であり、同書の編集委員長、御歌所長、東宮侍従長を歴任した入江爲守氏は入江相政氏の実父である。[91]

入江相政氏の言う「御原作」、即ち宮内庁所蔵の原本『明治天皇御集稿本』は、現在宮内庁公文書館に保管されている。同館に調査を依頼したところ、『御製歌「よもの海」』は『明治天皇御集稿本（八）』所収で、「お題」は「四海兄弟」との回答を得た。[92] しかし、入江相政氏が明治天皇の侍従に聞いたところを記すに、「（明治）天皇は、内閣や陸、海軍等から差し出された上奏書類の大型の封筒の御不要のを御自身ナイフで切り開いて、それに薄墨で（御製歌を）お書きになつた」。[93] 従って、宮内庁所蔵の原本も、明治天皇の御親筆を製本した訳ではなく、実際の「お題」、又は「お題」の有無は不明と言える。

９．３．表記

次に、表記面を検討する。宮内省蔵版、文部省発行編の『明治天皇御集』によると、「御集の原本は木版」で、「漢字は行草體」、「假名は多く變體」を用い、「濁點を附せず」である。(94) しかし、御製歌が様々な人の手を介し記録、編纂、印刷、製本、出版され、国民の目に触れる時には、作為、不作為を含め、結果的には多数の異種が存在する。（以下省略）

10. 佐々木巴陵の「暗号」

万葉仮名表記を含む『御製歌「よもの海」』は 1912 年出版の佐々木巴陵編『明治天皇御製帖』（以下、佐々木本）に所収されている。(95) しかし、同書の「与もの宇三み奈はらから當おもふ世耳なと奈み可勢能當ちさわく羅蕪」にも掛け字は認められない。又同御製歌中に漢字による対比構成も認められない。

万葉仮名による「よもの海」は、『大嘗会悠紀主基和歌』に次の 2 首認められる。(96)

与裳乃海毛　賀久己曾安良女　於久裳川　一日毛波乃　立津時曾無支
与裳乃宇美　乎岐都能那美乃　遠登毛勢弖　布那勢乃波之璽　支利多知和多留

しかし、上記の 2 首が全句完全な万葉仮名表記であるのに対し、佐々木本の『御製歌「よもの海」』は、14 文字のみが漢字で表記されている。筆者はこれを、同本の編者、佐々木巴陵の「暗号」、即ち、読者へのメッセージではないかと考え、以下に解読を試みる。

佐々木本の『御製歌「よもの海」』の 14 文字、即ち「与」、「宇」、「三」、「奈」、「當」、「世」、「耳」、「奈」、「可」、「勢」、「能」、「當」、「羅」、「蕪」、を、平仮名にすると、「ようみなとよになかせのとらむ」となる。筆者はまず、「与宇三」を、素直に「四海」と理解したい。更に「奈」を、「三」との掛け字で「皆」と理解するとともに、疫病神の「儺」の暗示と推定する。次に「當世耳」を「騒ぎ」を意味する「響み／動み」、とする。「奈可勢」を「（人を）困らせる人」の意の「泣かせ」と推定し、

次に「能」を、現代語の「が」に相当する主格の他に、動作の目的・対象を示す連用格、現代語の「を」と推定する。最後に「當羅蕪」の「む」は意思、又は推量と理解し、「摂らむ」又は「取らむ」の漢字をあてる。即ち、主格助詞の「の」即ち現代語の「が」と推定した場合、人々を困らせる何者かが四海を摂るであろう、摂りつつある、という推量となり、連用格の「の」即ち現代語の「を」と推定した場合、厄介者を筆者が除去しよう、除去したい、という意思であると考える。

かように仮定すると、「人々を困らせる人、厄介者」とは誰かとういう問題になろう。筆者はこれを大正天皇と考える。佐々木本はその奥付に、1912（大正元）年 10 月 30 日印刷、同年 11 月 3 日発行と記されている。明治天皇の崩御が同年 7 月 30 日であるから、その約 90 日後に印刷された書籍である。筆者は、編者佐々木巴陵が病弱な大正天皇の治世を不運であると恨んだと理解する事の妥当性は高いと考える。

11. 近代天皇と御製歌

明治天皇［1852－1912（在位 1867－1912）］、睦仁、幼名祐宮は孝明天皇の第二皇子として誕生、1867 年、15 歳で第百二十二代天皇に即位した。その生涯に詠まれた歌は 9 万 3032 首とされる。明治天皇はその在位期間に二度の対外戦争を経験した。即ち、日清戦争［1894－1895］と日露戦争［1904－1905］である。しかし一般に明治天皇は両戦役に対し否定的であったと言われており、実際『明治天皇紀』の記述もそれを裏書きする。松本健一も日清戦争について『明治天皇紀』を引用した上、「巷間に伝わっているところでは、これは『朕の戦争にあらず』とまでいったのである」と書き、日露戦争については「天皇じしんはその開戦に最後の最後まで積極的ではなかった」と書いている。(97) 又、ドナルド・キーンは、明治天皇の品性、為人を、領土拡大を志向するロシア皇帝ニコライ二世並びにニコライ二世に満州侵略を教唆する独逸皇帝ヴィルヘルム二世と比較し、「唯一その肩書にふさわしい人物だった」と評価している。(98)

明治天皇の御製歌について、詠草数の公称 9 万 3032 首は歴代天皇の中で最高

と推察され、入江相政氏は「もとより數の上で和歌史上のレコードである」と書いている。[99]『歴代天皇の御歌』によると、明治天皇は幼少時より父帝孝明天皇から和歌の添削を受けつつ成長し、「不世出の歌聖と崇められ」るまでになった。[100]

大正天皇［1879－1926（在位 1912－1926）］は生まれながらに病弱で、後年は身体不自由であった。在位期間が 15 年であり、更に 1921 年 11 月 25 日の皇太子迪宮（後の昭和天皇）の摂政就任以来実質上引退していた。近代天皇制下、目立たぬ存在である。国立国会図書館の蔵書数でも、大正天皇に関する書籍は明治天皇に関するそれの 10% 以下、昭和天皇に関するそれの 20% 以下である（表3参照）。出版公開された御製集の数もこの数字にほぼ比例する。大正天皇自身が「和歌よりも漢詩が得意」と言うよう、「1896 年から 1917 年まで、古語古詩を 14 首、七言古詩を 131 首、五言律詩を 7 首、七言律詩を 9 首、五言絶句を 77 首、七言絶句を 1129 首作ったとされるが、ほとんどは知られていない」。[101]「和歌」については、詠草数が確認できないが、宮内省図書寮編、宮内省図書寮発行の『大正天皇御製歌集』は上下巻合計 465 首を所収している。[102]

昭和天皇［1901－1939（在位 1926－1989）］、裕仁、幼名迪宮は大正天皇の第一皇子として誕生、1921 年、20 歳にして大正天皇の摂政となり、1925 年、24 歳で践祚した。昭和天皇の平和愛好的イメージは戦後民主主義の定着過程で形成されたのであるが、少なくとも、中国大陸での戦火拡大と対米英開戦に関する限り消極的であった。

昭和天皇の御製歌は、戦前のそれと戦後のそれの間に大きな差異が認められる。戦前の御製歌には、軍の統率者、大元帥として詠草した御製歌が多数含まれ、たとえ開戦が不本意であっても、一旦戦端が開かれれば、大元帥として軍を激励する御製歌を詠草している。又、戦後の御製歌には各地を行幸啓し、国民を激励、慰労した御製が多数認められる。昭和天皇の御製歌に認められる戦前と戦後の差異は、戦前と戦後の、天皇の憲法上の性格の断絶と、それに伴う天皇の社会的行動の変化の反映と言い得る。

表 3：表題別国立国会図書館蔵書数 (103)

明治天皇	610 件
大正天皇	60 件
昭和天皇	314 件

12. 二人の天皇と『御製歌「よもの海」』

明治天皇と昭和天皇には多くの共通点が見られる。これは、明治天皇が特に昭和天皇の教育に熱心であった事と、昭和天皇自身が明治天皇を理想像とした事による帰結であるが、昭和天皇が明治天皇の理念を踏襲してとった行動の一つとしても、開戦を前にした 1941 年 9 月 6 日の御前会議に於ける御製の引用を挙げる事ができる。昭和天皇は、外交交渉を主とする政府答弁の際に発言をしなかった陸軍参謀総長杉山元と海軍軍令部総長永野修身に対し、その考えを問うた後、『御製歌「よもの海」』を二度繰り返している。

よもの海　みなはらからと　思ふ世に　など波風の　たちさわぐらむ

昭和天皇はさらに続けて、自身は「常に、この御製を拝誦している。どうか」と御下問している。(104) 明治天皇の御製歌を引用した上の御下問は、形式上は御下問であるが、実質上は戦争反対の意思表明である。

13. 『御製歌「よもの海」』の解釈変化と戦意高揚

次に『御製歌「よもの海」』の解釈について検討する。本来解説文の無い御製に解説が付され出版される場合、解説者や出版者等、当時の社会情勢を反映する何らかの第三者の意図が盛り込まれる。そこで、近代デジタルライブラリー所蔵の 27 点を検討すると、解説又は説明が付されたものが 5 点確認される。(105) 以下に解説・説明文を出版年順に比較検討する。

5 点中、最も古い 1915（大正 4）年に大日本皇道実行会より出版された『明治天皇御製百首』（以下『百首』）では、「四海皆兄弟とむつひあふ平和の世なるに

とも壽れば戦争のおこるをいってな□きおも□に大御心の……」と解説文を付し、戦争に向かいつつある国際情勢を客観的に述べた上で、天皇の心情を推測している。(106)

1922（大正 11）年に明治図書より出版された『明治天皇御製謹註』（以下『謹註』）では、語釈として、「『四方の海』は世界。『波風』戦争などをさす」とあり、通釈として「四海皆兄弟と思つて居るこの世界に、どうして騒がしい事件が起るのであらう」とある。(107) この解釈は、戦争に向かいつつある国際情勢に対し、客観的に疑問を呈している。

一方、1924（大正 13）年に大日本国民教育会が出版した『明治天皇御製謹解』（以下『謹解』）では、「四海皆同胞と思ふ世の中に何うして斯うも波風立ち騒き、争ひごとの起ることであらう。誠に嘆かはしいことである」、「などは何故の意。はらからは同胞、兄弟の意」と解説が付されている。(108) 1922 年の『謹註』との差異は、『謹解』の解説者、即ち編者たる大日本国民教育会による主観的状況評価が付加された点である。

1930（昭和 5）年に京都府立桃山中学校金成会が出版した『明治天皇御製読本』（以下『読本』）は、御製歌 178 首を収録し内容により 33 種類に分類している。(109) 例えば、最も歌の多い項目は「御仁政・二十一首」で、次いで「日露の役に詠み給へる・十五首」である。それ等の項目の中で「よもの海」は「世界平和・五首」に分類されている。「日露の役」から分離し、この項目を設定する事自体が編集者の主観を強く反映しているが、更に解説には次の如くある。「露の横暴は、遂に我に迫つた。我は自衛上、憤然起つて茲に砲火相見ゆるの止むなきに至つた。この御製は……平素各國との親交、世界の平和を念とせらるゝ大帝が、如何に遺憾に御思召給うたかは、一首の上に躍如として、世界的・國際的・尊い御作である」。(110) 編集者はロシアを「露の横暴」と非難し、日本の戦争政策を「自衛上、憤然起つて」と正当化している。ここでの編集者の評価は、1924 年の『謹解』の主観的状況評価と異なり、1930 年の『読本』では「尊い御作」という御製自体の評価になっている。

1933（昭和 8）年 5 月 25 日発行の東洋生命保険奉公部『明治天皇御製歌百首』は、その扉裏の前書きと社長木村雄次の記によると、1928（昭和 3）年に契約者に贈呈された大典記念契約の記念品を活字本に改めたものである。(111) しかし、同本は 5 頁から 19 頁までが「明治天皇御製歌百首」部で、21 頁から 64 頁までが「明治天皇の御製歌につきて」、65 頁から 74 頁までが「御製歌と我等の日常生活」と題された同社常務取締役奉公部長細貝正邦による解説書（以下「細貝解説」）である。(112)「百首」部所収の御製を「明治天皇の御製歌につきて」で再録し長文の解説を付している。従って、解説文は 1933 年の活字本発行に際して書かれたものと推測される。「細貝解説」は「明治天皇は武力を以て世界を征服しようなどゝ云ふお考は、御持ちになりませんでした」と述べた上で『御製歌「よもの海」』は「明にそれを示してゐます」と解説している。(113)

1915 年の『百首』、1922 年の『謹註』、1924 年の『謹解』、1930 年の『読本』、1933 年の「細貝解説」を比較すると、解説文が次第に客観的状況評価からロシア批判、更には日本の戦争政策の正当化へと変化している事がわかる。

「細貝解説」は『御製歌「よもの海」』の解説に続けて次の御製歌の解説をしている。

いつくしみ　あまねかりせば　もろこしの　野にふす虎も　なつかざらめや

細貝は、当該御製歌は明治天皇が「仁慈を八紘に述べたまはむとする崇高な御理想を抱」いていた事を示すと言う。(114) 1940 年以降松岡洋介外務大臣の下、日本は大東亜共栄圏構想を推進するが、その際のスローガンとして好まれた四文字熟語が「八紘一宇」であった事を考えると、無料で配布された「細貝解説」は大衆の戦意高揚に寄与したと推測される。

14. 公的真意

14. 1. 公的真意の示唆

天皇の真意、天皇のみならず、そもそも他人の心中は、推測する事しかできない。しかし、機関としての天皇は、公的な意思、公的真意を示唆する事ができる為、我々はその公的真意を推察、推定できる。しからば、1940 年の開戦にあたる昭和天皇の公的意思は如何にあったか。本項は昭和天皇の公的真意を側近木戸幸一の日記から考察する。

昭和天皇が対米戦開戦に反対であった事は、当時の御前会議出席者や重臣、秘書官等の日記や手記により既に明らかである。1941 年 9 月 6 日の御前会議に於いて『御製歌「よもの海」』を繰り返し読んだ際、昭和天皇が毎日それを読んでいる事を如何思うか、と問われた人物は、外交交渉を優先する政府に無言を以て賛意を示さなかった参謀総長杉山元と軍令部総長永野修身である。統帥権独立の建前から考慮すると、杉山と永野の無言は統帥部の政府への不干渉と理解し得る為、必ずしも非難されるべきものではない。寧ろこの場合、昭和天皇の強い意思表示と理解されるべきである。

昭和天皇の側近であった内大臣木戸幸一は、この日午前の拝謁に続き午後、二度目の拝謁をしている。木戸は「一時十分より一時三十分迄、拝謁、御前会議の模様につきお話あり。原議長の外交工作を主とするの趣旨なりや云々の質問に対し、海軍大臣より答弁し統帥部は発言せざりしに対し、最後に御発言あり、統帥部の答弁せざるを遺憾とすと仰せあり、明治天皇の御製『四方の海』の御歌を御引用に相成り、外交工作に全幅の協力をなすべき旨仰せられたる旨奉る」と自身の日記に記している。(115)

木戸日記の記述から『御製歌「よもの海」』に託された昭和天皇の公的真意は、直接的には統帥部の意思表示が無かった事に対する不満であり、間接的には外交工作を主とする政府方針への賛意、そして恐らくは開戦には反対であったと推察される。事実、『昭和天皇独白録』によると、昭和天皇は当日御前会議に先立つ 9 月 5 日、（御前会議の案が）「之では戦争が主で交渉が従であるから、私は近衛

に対し、交渉に重点を置く案に改めんことを要求」している。[116]

14．２．公的真意の理解

昭和天皇の公的真意は統帥部及び政府に理解されていたか。本項では盧溝橋事件以来戦線拡大の直接的責任を担う陸軍に焦点を当て、統帥部は参謀総長杉山元、政府は陸軍大臣で開戦時の内閣総理大臣、東條英機の理解を検討する。

杉山は1941年9月6日の日記に昭和天皇、軍令部長永野修身、杉山自身の御前会議に於ける発言を、誤字はあるものの克明に記録しつつ自己の理解を記している。杉山は、『直接「遺憾ナリ」トノオ言葉アリシハ恐懼ノ至リナリ　恐察スルニ極力外交ニヨリ目的達成ニ努力スヘキ御思召ナルコトハ明ナリ又統帥部カ何カ戦争ヲ主トスルコトヲ考ヘ居ルニアラスヤトオ考ヘカトモ拝察セラルル節ナシトセス』と日記に記している。[117] この記述から、昭和天皇に直接遺憾の言葉を聞かされた杉山の恐懼する姿が容易に想像できるが、同時に、昭和天皇に不信感を持たれているのではないかという不満に近い不安感を漏らしている。従って、杉山は、戦争を主とする政策には昭和天皇は反対であると理解する以上に、昭和天皇が反戦的であると考えたと言える。しかし、参謀本部内は既に主戦論が主流を占め、昭和天皇の開戦反対を危惧する部員たちの様子を元大本営参謀種村佐孝が『大本営機密日誌』に以下のように記している。[118]「一時は参謀本部内の空気はサッと緊張したが、御前会議案は、両総長の奉答により御嘉納あったようで、一同安堵した」。[119]

一方、東條は陸相官邸に帰ると昭和天皇の意思が和平にある事を周囲の者に伝えている。[120] 1941年10月17日、東條に組閣の大命が降下する。『東條内閣総理大臣機密記録』によると大命降下の翌日18日、東條は「お上より日米交渉を白紙にもどしてやり直すこと、成るべく戦争にならぬ様に考慮すること等、仰せ出され……」と秘書官達に話している。[121] 東條内閣の商工大臣として初入閣を果たし、戦後は第56・57代内閣総理大臣を務めた岸信介もその回想録で商工大臣就任のいきさつを述べているが、そこで東條と岸は戦争回避努力の確認をしてい

る。即ち、「私（岸）のところに東條さんから電話がかかってきて、君に商工大臣になってもらいたい、という。私は……戦争になるということであるのか、あるいは……できるだけ戦争を回避するというのか、そのご方針を聞かないと、お引受けするわけにはゆかない……と言ったら、俺は組閣で忙しい。君の心配については、最後まで戦争をしないつもりで、日米関係を調整するつもりだ」。(122) 更に『東條内閣総理大臣機密記録』には 12 月 7 日付で次の如くある。「御前会議にて……決定後、東條首相はしみじみと述懐せられた。『お上より日米交渉の件は白紙にかへして再研[ママ]討議せよと仰せられその通り実施したが、どうしても此際戦争に突入しなければならぬとの結論に達し、お上の御許しを願つたが仲々お許しがなく……ほんとにお上は真から平和を愛し大事にしておられることを知つた……』」。(123) 東條は天皇の公的意思を理解し、総理として天皇の意思に沿うべく考えたが、陸相として陸軍を抑える事が出来なかった。陸軍参謀として東條をよく知る片倉哀は『片倉参謀の証言　叛乱と鎮圧』で東條を評して「誠忠の士」と書いているが、結果として昭和天皇の意に沿う事が出来なかった「誠忠の士」東條は、開戦を前に深夜布団の上に正座し慟哭しているのを妻勝子に目撃されている。(124)

種村、東條、片倉の日誌、岸の回想、東條の妻勝子の目撃談を総合すると、東條自身は昭和天皇の和平希望を十分理解していたと言える。

15. 戦争と御製歌

本節に於いては、日清戦争期並びに日露戦争期に詠まれた明治天皇の諸御製歌を調査し、両戦争間に於ける明治天皇の心境の差異を考察する。

昭和期に於いては、1945 年 8 月 15 日の敗戦を経て、国体護持、天皇制存続は連合国軍総司令部の占領政策との補完関係により実質的に保証された。米国型民主主義と天皇制との融合が唯一の国体護持方法であった日本は象徴天皇制を創出し、指導層は天皇の平和主義者としてのイメージを前面に押し出した。事実として開戦時の昭和天皇は、明治天皇の『御製歌「よもの海」』を引用する事により、

外交交渉優先と戦争忌避を示唆した。しかしこの事実を以て昭和天皇が平和主義者である証拠としたり、ましてや明治天皇や歴代天皇を平和主義者であると論ずるのは論理飛躍である。

御製歌に込められたであろう天皇の心情を推察するには、御製歌自体の解釈に加え、それが詠まれた時代背景に注意する必要がある。『御製歌「よもの海」』は1904（明治37）年の日露開戦の直前に詠まれたが、日本にとって最初の対外戦争であった日清戦争に於いて同様の御製歌が詠まれたであろうか。日清戦争の開戦は実質的には1894（明治27）年7月で、宣戦布告が8月1日であるから、もし、明治天皇が平和を希求したならば、同年中1月から7月までに平和を希望する意の御製歌が詠まれてしかるべきである。

そこで、1928年文部省発行の宮内省編『明治天皇御集』及び1940年文岳堂出版部発行の宮内省編『明治天皇御製集』を調査した。両書（以下、宮内省本）共宮内省蔵版であり、お題と御製歌の紙面上の配置が異なるが、内容は同じ1918年12月20日に編成奏上されたもので、1867首を所収している。後者は奥付に「宮内省許可済」の記載がある故、後者の底本が前者である。

宮内省本は1894（明治27）年詠草の御製歌として7首所収していたが、平和希求の意を示唆する御製歌は所収されていなかった。(125) 寧ろ、新年に詠じた次の「梅花先春」は中国大陸や朝鮮半島の情勢は意に介さないとの解釈も可能である。(126)

春風も　ふくこゝちして　あらたまの　年の初日に　匂ふうめかな

尤も当該御製歌を咒歌として理解する事は可能であろう。しかし、1894年の御製歌中に、平和希求や世界情勢への憂慮が詠じられたものが確認できない点から推量すると、日清戦争に関する限り、明治天皇は情勢を殆ど意に介さなかったと考えてよいのではなかろうか。

日清戦争に勝利した1895（明治28）年の御製歌としては僅かに次の1首が宮

内省本に所収されている。[127] お題は「旅順の戰のさまをきゝて」である。

世にたかく　ひゞきけるかな　松樹山　せめおとしつる　かちどきの聲
せめおとしたる　突撃の聲

一方、日露戦争に関しては、政府が対露戦を議論すると、明治天皇はしばしば不快の意を表している事は既に論じた通りである。

文部省発行の宮内省本の初版出版年は1922（大正11）年である。第一次世界大戦以降日米間の対立は激化し、ロシア革命後の日本のシベリア出兵は日米対立に拍車をかけた。1920年の世界恐慌と建艦競争を経て、1921年11月から翌1922年2月のワシントン会議に至った。ワシントン体制は、経済的視点からは日本にとっても好ましいものであったが、海軍にとっての対米英6割の艦船保有屯数制限や、陸軍にとっての6万人の人員削減に加えてシベリア撤兵等、1922年は日本が米英に屈服したかの如き時代的雰囲気があったと想像される。

かようなる時代背景のもと、出版に際し、文部省乃至宮内省が国民の士気を考慮し、選択編集をなしたと考えるべきではなかろうか。

岡野弘彦は「日清戦争（一九九四[ママ]～一九九五[ママ]）、日露戦争（一九〇四～一九〇五）と二度の戦争においても、平和を願い国民の無事を願う歌が多く詠まれた」と書いている。[128] しかし、「世にたかくひゞきけるかな」には痛快感さえ感じられる。更に、「松樹山」とは旅順要塞の松樹山砲台又は松樹山堡塁を指すが、これを掛け字として「待つ機」山と読むと、明治天皇が勝利すべき戦争の勝機を、満を持して待っていたと解す事が可能である。

天皇が平和主義者ならば、戦争に勝利した際に喜びの歌を詠じる行為は理解しがたい。しかし、明治天皇は日露戦争に勝利した1905（明治38）年、戦勝の喜びを詠んでいる。例として次の4首を挙げることができる。お題は「新年祝」である。

あたらしき　年のたよりに　仇の城　ひらきにけりと　きくぞ嬉しき
つたへきにけり
よものうみ　波しずまりて　ちはやぶる　神のみいつぞ　かがやきにける
山深く　こもりしたかも　いでぬらし　軍のかちを　世につげむとて
いさぎよく　かちどきあげて　沖つ浪　かへりし船を　見るぞうれしき
いさましく

最初の御製歌は、新年早々自軍がロシアの旅順を陥落させた報を聞いた嬉しさを詠んでおり、大元帥として軍をねぎらっていると解される。次の「よものうみ波しずまりて」は、開戦前の『御製歌「よもの海」』と対をなす作である。日露戦争が静まった事により輝く神の威光を詠じているのであるから、神とは皇祖皇宗を指す。即ち、第二の御製歌は、天皇が一族の長として先祖への感謝の意を詠じたと理解し得る。第三の御製歌は最初の御製と類似しており、大元帥として自軍の勝利を喜び詠じたものである。最後の御製歌も又大元帥として、凱旋する海軍をねぎらい喜びを詠じたものと解す事が可能である。これら4首の特徴は、二番目の「よものうみ　波しずまりて」は他の3首とやや性格を異にするものの、いずれも戦勝の喜びを詠じており、第一首と四首はそれぞれ「嬉しき」、「うれしき」と直接的な表現形式を採っている。又、第三首も喜びの対象を「軍のかち」と直接表現している点に特徴がある。第二、第三の御製歌を咒歌と解す事は可能であろう。しかし、最初と最後の御製歌の結句「嬉しき」、「うれしき」は、それぞれ「体験過去」の直接表現である。かようなる直接的表現を以って戦勝の喜びを御製歌にする天皇を平和主義者と看做すのは現代的感覚では無理があろう。

16. 結論

「よもの海」は平安時代より詠じられてきたもので、詠者の世界観を反映する語句である。江戸時代、「よもの海」には現代的意味の「世界」を示す兆候が認められ、明治時代には明確に「世界」を意味する用法が認められる。筆者はこの

変化を、近代国民国家としての明治日本の成立とそれに伴う世界観の変化の反映と考える。

又、歴代天皇は御製歌を通じて多く発言している。今日の如く情報媒体が発達していなかった時代に於いては、御製歌は単なる文芸作品ではなく、御製歌自体が情報媒体でもあった。しかし、今日に於いては、天皇は自ら記者会見を受け、或いは宮内庁を通じ発言をする為、御製歌の情報媒体としての価値は低い。

近代以前に於いても、和歌の詠草は発表が前提であるからには、何らかの取捨選択があり、和歌集編纂にあたっては、編者による取捨選択があった筈であるが、近代以降、情報媒体の発達に伴い、御製歌が発表されるまでに行われる取捨選択が増加したであろう事は容易に想像し得る。例えば、1904（明治 37）年、明治天皇が大阪へ行幸した際、列車内で大阪を褒める御製歌を作ったが、社会的影響を考慮して発表されなかった。つまり、本来メディアであった御製歌の外郭に、更に近代的マス・メディアが出現し、それ等を通して御製歌が神聖、至高な外観を政治的にまとわせられたのである。

『御製歌「よもの海」』の解説文は時代が下るに従い、対露戦の正当化とロシア非難の傾向を示す。大正初期の解説文は、日露関係を客観的に述べる傾向があるが、昭和期になると国家意思の正当化、或いはロシアを批難する文言が付加される傾向が認められる。

公開されている明治天皇の御製歌から言える事は、明治天皇は公的には日清戦争に関しては特別な危惧を抱かず、その勝利を痛快に喜んだ。日露戦争に関しては否定的であったが、その勝利については直接的表現で喜びを詠じた。

昭和天皇は『御製歌「よもの海」』を引用し、対米開戦に否定的意を表明したが、戦争をするからには日露戦争の如き勝利を希望したであろうと考えるのが妥当である。1945（昭和 20）年の敗戦以降、昭和天皇は外地に残る軍人や軍属、戦死者や傷病者に心を運び、過酷な状況下の国民を思いやり、やがて復興を希望する意の御製歌を多く発表するようになる。しかし、日露戦争の如く勝利を得ていたら、大元帥陛下たる昭和天皇は帝国陸海軍を嘉賞し、喜びの御製歌を詠じたので

はなかろうか。

勿論、戦前戦後を問わず個人としての天皇は平和主義者であり得る。しかし、機関としての、公の立場としての天皇は、天皇の個人的心情とは別の理論の下に行動する。大日本帝国憲法下では天皇は公的に国家元首であると共に、大元帥でもあった。更に、私的には一族の長であり、家庭に於いては夫であり父である。その様々な立場に於ける様々な心情の葛藤の中で、明治天皇が明治 37 年 2 月 4 日の夕刻、私的空間に於いて詠草した御製歌が「四海兄弟」、『御製歌「よもの海」』であった。

御製歌は天皇のそれぞれの立場で詠まれると考えるべきであり、筆者は御製歌を以て天皇個人の思想を論ずることは避けるべきと考える。我々は御製歌を通し国家意思の心情的理解が可能なのである。しかし、天皇は自ら御製歌に説明を加える事は無い。換言せば、御製歌自体は明確な意図を持っていても、その解釈には我々が何を読み取るかの余地、即ち「曖昧」さが残されており、政治決断では割り切れぬところの「曖昧」な部分を天皇が負っていると言い得る。又、天皇の御製歌の全てが公開される訳ではなく、天皇自身、侍従、皇族等の天皇の私的領域の人々から、宮内省、宮内庁の職員等行政官の手を経て、公開するにふさわしいと判断された御製歌のみが公開されていると考えるべきである。従って、公開されている御製歌は、それ自体が国家意思を「曖昧」に表現すると言える。

註

（1） 御製歌は和歌の概念に含まれ、各御集の解説、先行研究書等に於いては、定型の御製歌を「御製」、非定型の御製歌を「お歌」等と呼び分けている。本稿に於いては天皇が作成した和歌、歌、全てを「御製歌」と呼称する。

（2） 本稿 8 節参照。

（3） （　）は筆者註、谷知子『天皇たちの和歌』、角川学芸出版、2010、16 頁。

（4） 岡野弘彦「御製にあらわれた明治天皇」、『明治天皇とその時代（正論 12 月号臨時増刊号）』、文藝春秋、2002、124－130 頁。

（5） 中西進『うたう天皇』、白水社、2011、27 頁。

（６）　前掲書、34 項。

（７）　品田悦一「万葉集に託されたもの―国民歌集の戦中と戦後」、浅田徹他（編）『帝国の和歌』、岩波書店、2006、207－228 頁。

（８）　ツベタナ・クリステワ『心づくしの日本語』、筑摩書房、2010、101 頁。

（９）　義和団事件は、公文書では「北清ノ事変」、総称して「北清事変」とも呼称される。

（10）　国立公文書館アジア歴史資料センター「日露戦争特別展Ⅱ」、国立公文書館アジア歴史資料センター、http://www.jacar.go.jp/nichiro/frame1.htm［アクセス日：20012 年 1 月 19 日］。

（11）　宣戦の詔書は 1904（明治 37 年）年 2 月 10 日付である。

（12）　徳富猪一郎『侯爵松方正義傳（坤巻）』、侯爵松方正義傳記編纂會、1935、885 頁。

（13）　外務省『日本外交年表竝主要文書（上巻）』、原書房、1976、220 頁。

（14）　ドナルド・キーン『明治天皇（下巻）』、新潮社、2002、349 頁、及び、明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990、175 頁。

（15）　ドナルド・キーン『明治天皇（下巻）』、新潮社、2002、351 頁。明治天皇『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990、2 頁では「苔むせるいはねの松の萬代もうごきなき世は神ぞもるらむ」と表記している。

（16）　宮内庁『明治天皇紀（第十）』、吉川弘文館、1974、584 頁。

（17）　ドナルド・キーン『明治天皇（下巻）』、新潮社、2002、351 頁。

（18）　前掲書、355 頁。明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990、924 頁では「思ふこと多き今年もうぐひすの聲はさすがにまてれぬるかな」と表記している。

（19）　松本健一『明治天皇という人』、毎日新聞社、2010、359－360 頁。原註、春畝公追頌會『伊藤博文傳（下巻）』、統正社、1943、628 頁。

（20）　松本健一『明治天皇という人』、毎日新聞社、2010、360 頁。

（21）　春畝公追頌會『伊藤博文傳』の凡例によると、同書は編纂にあたり、本文中の「伊藤」又は「博文」は「公」に書き換えられ、他の人の敬称は省略されている。又、誤字、脱字、当て字等、適宜補正されている。

（22）　宮内庁『明治天皇紀（第十）』、吉川弘文館、1974、589－590 頁。

（23）　前掲書、590 頁。春畝公追頌會『伊藤博文傳（下巻）』、統正社、1943、626－627 頁の同文は濁音句読点あり。

（24）　筆者下線、宮内庁『明治天皇紀（第十）』、吉川弘文館、1974、591 頁。

(25) 前掲書、593 頁。

(26) 筆者下線、前掲書、594 頁。

(27) 春畝公追頌會『伊藤博文傳（下巻)』、統正社、1943、627 頁。

(28) 宮内庁『明治天皇紀（第十)』、吉川弘文館、1974、597 頁。

(29) 前掲書、598 頁。

(30) 春畝公追頌會『伊藤博文傳』には、御前会議は午後 1 時 40 分開始の旨の記述がある。

(31) 筆者下線、桂太郎・宇野俊一『桂太郎自伝』、平凡社、1993、330 頁。

(32) 春畝公追頌會『伊藤博文傳（下巻)』、統正社、1943、629 頁。

(33) 宮内庁『明治天皇紀（第十)』、吉川弘文館、1974、597 頁。

(34) 前掲書、598 頁。

(35) 前掲書、604 頁。

(36) 寺内正毅・山本四朗『寺内正毅日記』、京都女子大学、1980、200－201 頁。

(37) 宮内庁『明治天皇紀（第十)』、吉川弘文館、1974、610 頁。

(38) 明治天皇･明治天皇御集委員会『新輯明治天皇御集』、明治神宮、1964 の「序」並びに、明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990 の「後記」。

(39) 明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990。

(40) 久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、1999。

(41) 筆者下線、前掲書。

(42) 日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典　第二十巻』、小学館、1979、214 頁。

(43) 諸橋轍次『大漢和辞典　巻三』、大修館、1996。

(44) 松村明『大辞林　第二版』、三省堂、1995。

(45) 『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 を使用。書籍版と CD-ROM 版との相違点は解題の題に認められる。書籍版は本文と解題の題が同一であるが、CD-ROM 版に於いては解題に「－解題」が付されている。例えば、書籍版に於ける『安法法師集』の解題、犬養廉「安法法師集」は、CD-ROM 版の犬養廉「安法法師集解題」に対応する。

(46) 『安法法師集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(47) 犬養廉「安法法師集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸

出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(48)　『安法法師集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(49)　前掲書。

(50)　福井迪子「馬内侍集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(51)　松本真奈美、高橋由紀、竹鼻績『中古歌仙集一』、明治書院、2004。

(52)　峯村文人・柏木由夫「散木奇歌集（俊頼）解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(53)　『散木奇歌集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(54)　『成仲集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(55)　久保田淳「成仲集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(56)　『前長門守時朝入京田舎打聞集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(57)　久保田淳・村尾誠一「前長門守時朝入京田舎打聞集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(58)　『前長門守時朝入京田舎打聞集』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(59)　長崎健、外村展子、中川博夫、小林和彦『前長門守時朝入京田舎打聞集全釈』、風間書房、1996、137 頁。

(60)　『玄玉和歌集』、『正治後度百首』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(61)　『後鳥羽院遠島百首』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。小田村寅二郎・小柳陽太郎『増補改訂　歴代天皇の御歌』、日本文教社、1989 では「海士」は平仮名で「あま」と表記されている。

(62)　田村柳壹「後鳥羽院遠島百首解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(63)　前掲書。

(64)　筆者下線、寺島恒世『後鳥羽院御集』、明治書院、1997、20 頁。

(65) 前掲書、51 頁。

(66) 『李花和歌集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(67) 福田秀一・湯浅忠夫「李花和歌集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(68) 前掲書。

(69) 『李花和歌集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(70) 『雅世集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(71) 田中新一・樋口芳麻呂「雅世集解題」、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(72) 前掲書。

(73) 『柏玉集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(74) 井上宗雄・山田洋嗣・湯浅忠夫「柏玉集解題」、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(75) 青木賢豪・安田徳子・西前正芳「大嘗会悠紀主基和歌解題」、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(76) 『大嘗会悠紀主基和歌』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(77) 青木賢豪・安田徳子・西前正芳「大嘗会悠紀主基和歌解題」、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(78) 『大嘗会悠紀主基和歌』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(79) 『大江戸倭歌集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(80) 揖斐高・白石良夫「大江戸倭歌集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。『大江戸倭歌集』、『新編国歌大観』 編集委員会 『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(81) 揖斐高・白石良夫「大江戸倭歌集解題」、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD-ROM Ver.2 所収。

(82)　小田村寅二郎・小柳陽太郎『増補改訂　歴代天皇の御歌』、日本文教社、1989。

(83)　相原宏美「後柏原天皇」、岡野弘彦・中村正明『天皇文業総覧（下）』、若草書房、2005、139－144 頁。

(84)　前掲書。

(85)　明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990、「序」、項数無し。

(86)　2012 年 1 月 11 日現在。

(87)　当該御製の解説に「四海兄弟と云題で」又は「『正述心緒』といふ題にて」とあるもの各 1 点を含むものとする。

(88)　諸橋轍次『大漢和辞典　巻三』、大修館、1996、2281 頁。

(89)　入江相政「後記」、明治天皇・明治天皇御集委員会『新輯明治天皇御集』、明治神宮、1964 の「後記」の 5 頁。

(90)　前掲書、5 頁。

(91)　宮内省『明治天皇御集』、文部省、1928、114 頁。

(92)　『明治天皇御集稿本（八）』の資料コードは 70873。宮内庁書陵部丸山氏より電話回答。

(93)　入江相政「後記」、明治天皇・明治天皇御集委員会『新輯明治天皇御集』、明治神宮、1964 の「後記」の 6 頁。

(94)　宮内省『明治天皇御集』、文部省、1928、表題紙裏、頁数無し。初版は大正 11 年発行で、筆者が参照したものは昭和 3 年発行の第四版である。表紙の題は『明治天皇御集全』だが、奥付に題は無く、「宮内省藏版、文部省發行、内閣印刷局印刷」と記載されている。

(95)　佐々木巴陵『明治天皇御製帖』、佐々木巴陵、1912。一部万葉仮名表記（「三那者（みなは）」と「王（わ）」）の大日本皇道実行会『明治天皇御製百首』、大日本皇道実行会出版部、1915 は除外。

(96)　『大嘗会悠紀主基和歌』、『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD ROM Ver.2 所収。

(97)　松本健一『明治天皇という人』、毎日新聞社、2010、300 頁、354 頁。

(98)　ドナルド・キーン『明治天皇（下巻）』、新潮社、2002、353 頁。

(99)　入江相政「後記」、明治天皇・明治天皇御集委員会『新輯明治天皇御集』、明治神宮、1964 の「後記」の 1 頁。

(100)　小田村寅二郎・小柳陽太郎『増補改訂　歴代天皇の御歌』、日本文教社、1989、321 頁。

(101)　原武史「大正天皇」、原武史・吉田裕『天皇・皇室辞典』、岩波書店、2005、155－159 頁。

（102）宮内省図書寮『大正天皇御製歌集』、宮内省図書寮、1945。本書は近代デジタルライブラリーにも所蔵されている。

（103）2012 年 7 月 25 日現在、書籍のみ、タイトルを AND 検索。

（104）参謀本部『杉山メモ（上）』、原書房、1987、311 頁。

（105）5 点に加え、漢訳付の中島気峥『明治天皇御製対照訳詩　附・明治神宮頌徳詞』、民友社、1923 があるが、漢訳が四言絶句の漢詩形式の為、解釈・解説文とは異なるものと考える。

（106）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、大日本皇道実行会『明治天皇御製百首』大日本皇道実行会出版部、1915、頁付なし、29/35 コマ、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/944896［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。□は解読不明文字、…は解読不明句を示す。

（107）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、亘理章三郎『明治天皇御製謹註』明治図書、1922、58－59 頁、43/137 コマ、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/970295［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。

（108）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、大日本国民教育会『明治天皇御製謹解』大日本国民教育会、1924、10 頁、17/41 コマ、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/964004［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。

（109）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、京都府立桃山中学校金城会『明治天皇御製読本』、京都府立桃山中学校金城会、1930 、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1028596［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。

（110）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、京都府立桃山中学校金城会『明治天皇御製読本』、京都府立桃山中学校金城会、1930、63－64 頁、36－37/63 コマ、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1028596［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。

（111）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、東洋生命保険株式会社奉公部『明治天皇御製歌百首』東洋生命保険、1935、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1110186［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。文中の「大典」は昭和天皇の即位礼と大嘗祭を指す。

（112）1928（昭和 3）年 11 月 10 日発行、1930（昭和 8）年 3 月 30 日の 89 版には「磯貝解説」は無い。

（113）国立国会図書館近代デジタルライブラリー収蔵、細貝正邦「明治天皇の御製につきて」、『明治天皇御製歌百首』、東洋生命保険株式会社奉公部、21－64 頁、東洋生命保険、1935、53 頁、29/43 コマ、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1110186［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］。

（114）前掲書。

（115）木戸幸一『木戸幸一日記』下巻、東京大学出版会、1966、905 頁。

（116）寺崎英成・マリコ・テラサキ・ミラー『昭和天皇独白録　寺崎英成・御用掛日記』、文藝春秋、1991、62 頁。

（117）参謀本部編『杉山メモ（上）』、原書房、1987、312 頁。

（118）種村佐孝『大本営機密日誌』、芙蓉書房、1995、99－100 頁。

（119）前掲書、100 頁。

（120）児島襄『天皇（Ⅳ）太平洋戦争』、文藝春秋、1981、235 頁など。

（121）伊藤隆・廣橋眞光・片島紀男編『東條内閣総理大臣機密記録』、東京大学出版会、1990、478 頁。

（122）岸信介・矢次和雄・伊藤隆『岸信介の回想』、文藝春秋、1981、49 頁。

（123）伊藤隆・廣橋眞光・片島紀男『東條内閣総理大臣機密記録』、東京大学出版会、1990、479 頁。尚、日付は十二月一日で、編者により［ママ］の字が付されている。東條の秘書官であった赤松貞雄氏の著書、赤松貞雄『東條秘書官機密日誌』、文藝春秋、1985 にも同様の記録がある。

（124）片倉哀『片倉参謀の証言　叛乱と鎮圧』、芙蓉書房、1981、95 頁。東條由布子『祖父東條英機「一切語るなかれ」増補改訂版』、文藝春秋、2000、219 頁。

（125）宮内省『明治天皇御集』、文部省、1928、及び宮内省・明治天皇『明治天皇御製集』、文岳堂出版部、1940。

（126）宮内省『明治天皇御集』、文部省、1928、34 頁。

（127）前掲書、35 頁。

（128）岡野弘彦「第百二十二代明治天皇」、岡野弘彦・中村正明他『天皇文業総覧（下）』、若草書房、2005、235－239 頁。

引用文献

辞書・辞典

久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』、角川書店、1999
日本国語大辞典刊行会『日本国語大辞典　第二十巻』、小学館、1979
原武史・吉田裕『天皇・皇室辞典』、岩波書店、2005
松村明『大辞林　第二版』、三省堂、1995
諸橋轍次『大漢和辞典　巻三』、『同　巻六』、大修館、1996

書籍

伊藤隆・廣橋眞光・片島紀男『東條内閣総理大臣機密記録』、東京大学出版会、1990
小田村寅二郎・小柳陽太郎『増補改訂　歴代天皇の御歌』、日本文教社、1989
外務省『日本外交年表竝主要文書（上巻）』、原書房、1976
片倉哀『片倉参謀の証言　叛乱と鎮圧』、芙蓉書房、1981
桂太郎・宇野俊一『桂太郎自伝』、平凡社、1993
岸信介・矢次和雄・伊藤隆『岸信介の回想』、文藝春秋、1981
木戸幸一『木戸幸一日記』、東京大学出版会、1966
宮内省『明治天皇御集』、文部省、1928
宮内庁『明治天皇紀（第十）』、吉川弘文館、1974
児島襄『天皇（Ⅳ）太平洋戦争』、文藝春秋、1981
参謀本部『杉山メモ（上）』、原書房、1987
春畝公追頌會『伊藤博文傳（下巻）』、統正社、1943
谷知子『天皇たちの和歌』、角川学芸出版、2010
種村佐孝『大本営機密日誌』、芙蓉書房、1995
ツベタナ・クリステワ『心づくしの日本語』、筑摩書房、2010
寺内正毅・山本四朗『寺内正毅日記』、京都女子大学、1980
寺崎英成・マリコ・テラサキ・ミラー『昭和天皇独白録　寺崎英成・御用掛日記』、文藝春秋、1991
東條由布子『祖父東條英機「一切語るなかれ」増補改訂版』、文藝春秋、2000
徳富猪一郎『侯爵松方正義傳（坤巻）』、侯爵松方正義傳記編纂會、1935
ドナルド・キーン『明治天皇（下巻）』、新潮社、2002
長崎健・外村展子・中川博夫・小林和彦『前長門守時朝入京田舎打聞集全釈』、風間書房、1996
中西進『うたう天皇』、白水社、2011
松本健一『明治天皇という人』、毎日新聞社、2010
松本真奈美・高橋由紀・竹鼻績『中古歌仙集一』、明治書院、2004
明治天皇・明治神宮『類纂新輯明治天皇御集』、明治神宮、1990
明治天皇・明治天皇御集委員会『新輯明治天皇御集』、明治神宮、1964

書籍所収論文等

相原宏美「後柏原天皇」、岡野弘彦・中村正明『天皇文業総覧（下）』、若草書房、2005、139－144 頁
岡野弘彦「御製にあらわれた明治天皇」、『明治天皇とその時代（正論 12 月号臨時増刊号）』、文藝春秋、2002、124－130 頁
岡野弘彦「第百二十二代明治天皇」、岡野弘彦・中村正明他『天皇文業総覧（下）』、若草書

房、2005、235－239 頁
品田悦一「万葉集に託されたもの―国民歌集の戦中と戦後」、『帝国の和歌』、岩波書店、2006、207－228 頁
原武史「大正天皇」、原武史・吉田裕『天皇・皇室辞典』、岩波書店、2005、155－159 頁

インターネット上の資料

国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵

・細貝正邦「明治天皇の御製につきて」、東洋生命保険株式会社奉公部編『明治天皇御製歌百首』、21－65 頁、東洋生命保険、1933、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1110186（13-35/43 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・伊藤泰蔵謹解『明治天皇御製神訓謹解』、朝野書店、1913、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/906448（59/101 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・京都府立桃山中学校金城会『明治天皇御製読本』、京都府立桃山中学校金城会、1930、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1028596（36-37/63 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・佐々木巴陵編『明治天皇御製帖』、佐々木巴陵、1912、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/918700（16/30 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・大日本皇道実行会編『明治天皇御製百首』、大日本皇道実行会出版部、1915、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/944896（29/35 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・大日本国民教育会編『明治天皇御製謹解』、大日本国民教育会、1924、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/964004（17/41 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・東洋生命保険株式会社奉公部編『明治天皇御製歌百首』、東洋生命保険、1935、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1110186（8、29/43 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・中島気峥『明治天皇御製対照訳詩　附・明治神宮頌徳詞』、民友社、1923、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/963861（23/43 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・明治天皇・宮内省編『明治天皇御製集』、文岳堂出版部、1940、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1104648（13、36/109 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・明治天皇「附録・御製」、藤川淡水『明治天皇御製御伽噺』、日本書院、1912、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1169788（172/191 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・明治天皇『明治天皇御製集』、趣味社、1912、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/916387（65/102 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・明治天皇『明治天皇御製百首』、常盤会、1923、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/919642（6/13 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］
・亘理章三郎『明治天皇御製謹註』、明治図書、1922、http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/970295（34/137 コマ）［アクセス日：2011 年 1 月 11 日］

その他

・ 国立公文書館アジア歴史資料センター「日露戦争特別展Ⅱ」、国立公文書館アジア歴史資料センター、http://www.jacar.go.jp/nichiro/frame1.htm［アクセス日：20012 年 7 月 19 日］

CD-ROM

『新編国歌大観』編集委員会『新編国歌大観』、角川学芸出版、2003、CD ROM Ver.2。
『安法法師集』及び犬養廉「安法法師集解題」、『大江戸倭歌集』及び揖斐高・白石良夫「大江戸倭歌集解題」、『雅世集』及び田中新一・樋口芳麻呂「雅世集解題」、『玄玉和歌集』、『後鳥羽院遠島百首』及び田村柳壹「後鳥羽院遠島百首解題」、『前長門守時朝入京田舎打聞集』及び久保田淳・村尾誠一「前長門守時朝入京田舎打聞集解題」、『散木奇歌集』及び峯村文人・柏木由夫「散木奇歌集（俊頼）解題」、『正治後度百首』、『成仲集』及び久保田淳「成仲集解題」、『大嘗会悠紀主基和歌』及び青木賢豪・安田徳子・西前正芳「大嘗会悠紀主基和歌解題」、『柏玉集』及び井上宗雄・山田洋嗣・湯浅忠夫「柏玉集解題」、『馬内侍集』及び福井迪子「馬内侍集解題」、『李花和歌集』及び福田秀一・湯浅忠夫「李花和歌集解題」

協力

宮内庁書陵部

A Study of the Imperial Composition *Yomonoumi*

HOMMA, Mitsunori G.

This paper examines the imperial composition *Yomonoumi*－how it was composed, and how the interpretation of it changed. *Yomonoumi* was originally composed in 1904 by the Meiji Emperor immediately before the Russo-Japanese War, and was quoted by the Showa Emperor just prior to the commencement of hostilities against the United States and the United Kingdom in 1941.

The seas of the world
Now I think
Embrace all brothers in one heart
So I wonder
Why the wind and waves rise in discord?
(“Four Seas Brothers” by H.I.M.Meiji)

In order to understand this poem, the term *yomonoumi*, other poems that include the term, and annotations of the poem are examined. The purpose of this paper is to clarify what imperial compositions are and how they are interpreted.

Yomonoumi is a word that reflects the worldviews of many Japanese poets, and it has been used since the Heian period. The term *yomonoumi* originally meant “the surrounding sea;” however, it came to imply “the world” in the Edo period, and retained this meaning in the Meiji period.

Emperors have often uttered their opinions through poems. Thus imperial

compositions have been media as well as literary works, especially before the modern age. However, the value of imperial compositions as media has declined because the Emperor agrees press interviews and publishes his statements through the Imperial Household Agency today.

Even prior to the modern era, a kind of selection must have been made by the poets themselves and or editors since the assumption of composing poems is publication. The selection became sever as the political influence of the Emperors increased in the modern era considering a social impact of the publication.

Annotations of the imperial composition *Yomonoumi* show tendency to justify Japan's act as times go. Earlier ones tend to describe the international relations but later ones tend to curse Russia.

What we can know through imperial compositions of the Meiji Emperor is that he did not officially entertain misgivings about the Sino-Japanese War of 1884-5, and was pleased with the victory to his great satisfaction. On the other hand, he was apprehensive about the Russo-Japanese War of 1904-5, but expressed his rejoice of the victory through imperial compositions with straightforward words.

The Showa Emperor expressed his negative opinion upon the commencement of hostilities in 1941 by quoting the imperial composition *Yomonoumi*. However, we can be fairly certain that he would publish poems of gratification as the generalissimo if the war ended in victory.

Of course, the Emperor in person can be a pacifist irrespective of antebellum or postbellum. However, the Emperor as an institution, or in his official capacity, he behaves under the different principle from that of a private person. Under the Constitution of the Empire Japan, the Emperor was the generalissimo as well as the head of state. At the same time, he was the head of the imperial family as well as the husband and the father at his home. The imperial composition *Yomonoumi*

was made as a result of struggle among these codes.

It seems reasonable to conclude that an imperial composition is made by the Emperor in his different positions. However, the Emperor never attaches annotations to his poems. Therefore, imperial compositions leave room for people to surmise what to read and what to imagine. A published imperial composition may imply the national intention that cannot be expressed clearly by the state.